

## 函南・服部徹の思想と行動

### —明治期「南進」論者の歷程—

後藤 乾一<sup>†</sup>

#### The Thoughts and Actions of Hattori Tōru: The Life of a Meiji “Southern Expansion” Advocate

Ken'ichi Goto

The name Hattori Tōru (1863–1908) has often appeared in Modern Japanese “Southern Expansion” Studies, particularly from the 1970s. *The Genealogy of “Southern Expansion”* (1975) by Yano Tōru dealt with Hattori as one of the seven eminent Meiji “Southern Expansionists,” along with Taguchi Ukichi and Shiga Shigetaka. Nonetheless, many details about his life remain unknown.

This paper examines more than ten of Hattori’s writings, then analyzes Hattori’s “southern expansion doctrine” as well as detailed steps of his “south sea” advance. Hattori, a low-ranking samurai of the Tosa clan in Kōchi Prefecture, came to Tokyo in his teens, and received tutelage at Gakunōsha Nōgakkō. This agricultural school was established by Tsuda Sen, the father of the founder of Tsuda Women’s College (Tsuda Umeko). He the individual introduced and promoted Western style agriculture in Japan. Heavily influenced by Tsuda, Hattori became interested in industrial development in the Ogasawara archipelago. In 1887, Hattori went to the Ogasawara archipelago as a member of the South Seas inspection delegation under the leadership of the governor of Tokyo, Takasaki Goroku. Subsequently, Hattori became an active advocate of a government initiated “Southern Expansion doctrine.”

Hattori was a well-known “southern expansionist” at that time, but around the time of Sino-Japan War, he also began to be deeply involved the “northern expansion”. He published *Tōa bōeki shinbun* [East Asia Trading newspaper] in Pusan, inspected in an expedition of Vladivostok and other area of eastern Siberia. After this, he powerfully proclaimed that this would be the place for expanding Japanese business rights along with “south sea”. In a sense, a “southern and northern co-expansion” advocacy of Hattori’s unique approach was not militaristic expansion but peaceful expansion throughout the process of economic development.

In 1908, Japan and the Netherlands East Indies Governments concluded a consular convention. Consequently, Hattori was appointed by the Japanese Ministry of Foreign Affairs in the same year to conduct research on the Netherlands East Indies’ economy as well as to determine the actual situation of the Japanese diaspora community. However, after traveling through Taiwan and Amoi, on May 24, 1908, while awaiting a ship to Java, Hattori died of an accident at river in Hong Kong Bay. The Ogasawara Archipelago initiated “southern expansion” trajectory of Hattori was initiated with the Ogasawara archipelago and was supposedly to end in Java, however. it ended before his end-point. Five days later, on May 29, 1908, his accidental death made headlines in the *Asahi Shinbun*.

---

<sup>†</sup> 早稲田大学名誉教授

## はじめに

1908（明治41）年5月24日夜、一人の初老の日本人が、香港の河舫から転落し水死した。「大阪日報」記者の肩書を持ち、外務省の委託を受け蘭領東インド（蘭印、現インドネシア）・ジャワ行の便船を待っていた服部徹（号凶南）という人物であった。服部は同年5月4日「南洋探検の壮図」につき台湾全島を視察後、厦門経由で香港に着いた直後のことであった<sup>(1)</sup>。

本論は、明治中期以降、小笠原諸島を基点に南洋群島各地を巡遊した実践的「南進」論者として知られた服部徹の思想と行動を、彼の十指にのぼる著作等を手がかりに考察するものである。また従来服部に言及した先行研究において、彼は主として明治期「南進」論との関わりで論じられてきたが、本論では朝鮮や東シベリアでの長期滞在や視察体験をもついわば「北進」論者としての服部の一面についても考察を試みたい。

## 1. 略歴と先行研究

### 1.1 自筆「履歴書」

服部徹の経歴につき種々の文献を調べ、また出身地の高知市立自由民権記念館や同県立図書館の協力を得て精査したが、地元での関係資料は驚くほど少なかった。知名度も低く、生年すら確定できなかった<sup>(2)</sup>。その後幸いにも、服部自筆の履歴書が外務省外交史料館に残されていることが判明したが（「服部徹蘭領ニューギニア、セレベス、爪哇、波羅地方状況調査之件」）、そこでも理由は不明だが肝心の生年は記されていない。ただ後述する服部の「朝鮮国在留禁止」に関する新聞記事（『朝日新聞』1893年7月23日付）の中で、その当時の彼の年齢は「29年10カ月」と明記されている。在釜山総領事室田義文の名で出された公式文書なので、おそらく正確なものと思われる。したがって逆算してみると、服部の生年は1863（文久3）年5月前後と推定できる。小笠原諸島との関係でみると、同じ土佐出身のジョン万次郎（中浜万次郎）、北越出身の平野廉蔵による父島近海での日本人最初の洋式捕鯨が試みられた時期と重なる<sup>(3)</sup>。その生年を基点に、服部が冒頭で触れた蘭印渡航時に書いた「履歴書」を紹介しておきたい。なおそこの居住地は、「東京市麹町区土手三番町七番地居住士族／当時大阪府西成郡中津村字下三番九拾六番地寄留」となっている。

- 一 明治16（1883）年 学農社農学校（津田仙校主）卒業
- 一 全17年 高知県判任〔属官〕御用係拜命
- 一 全19年 大日本農会録事祕嘱託
- 一 全20年 南洋、火山列島〔硫黄諸島〕、探検ノ為渡航ス
- 一 全21年 南洋マリアナ、カロリン群島ヲ視察ス
- 一 全22年 南島商会支配人トナル
- 一 全23年 大阪東雲新聞記者トナル
- 一 全24年 朝鮮ヲ経テ東部西比利亜〔シベリア〕地方ヲ視察ス
- 一 全25年 釜山ニ於テ東亜貿易新聞ヲ起シ主筆トナル
- 一 全27年 帰朝
- 一 全28年 再ヒ朝鮮ニ渡航ス
- 一 全29年 帰朝やまと新聞主筆トナル

- 一 全 31 年 毎日新聞政治部編纂長トナル
  - 一 全 34 年 大阪府堺市ノ招聘ニ応ジ堺史編纂主任ヲ命セラル
  - 一 全 36 年 大阪商業会議所囑託員トナリ保護貿易調査ニ従事ス
  - 一 全 39 年 日本通信社ニ入ル
  - 一 全 40 年 大阪日報記者トナル
- 明治 41 (1908) 年 3 月 14 日

服部の経歴の詳細は次章以下に譲るが、この略年譜から浮かび上がる大きな特徴として以下の三点をあげておきたい。①明治 20 年代初めは小笠原諸島以南の「南洋」への強い関心を有していた。他方 20 年代中葉以降は朝鮮、シベリア等へのいわば「北進」的関心をも強めている。②この間明治 20 年代に入り、「大阪東雲新聞」にはじまり合計 6 社の新聞社と関わりをもっている。十点余の著作をもつ服部が、ジャーナリスト的感覚と文才に恵まれた人物であることがうかがえる。③出身地土佐は歴史的に大阪を中心とする阪神経済圏との関係が深い。服部も人生後半の多くを大阪市内で過ごしている。かつ大阪の官・民諸機関の委託を受け、著述活動を行っている。④この履歴書を記してから約一か月半後に、服部は最初の対外関心地「南洋」（東南アジア）に向け出立することになったが、そのことも服部の実践的「南進」論者としての生涯を象徴するかのごとくである。

## 1.2 服部徹の著作一覧

45 歳という当時としても比較的短い生涯ではあったが、服部は以下のような十点余の編著書を刊行している。

- ①『田圃植物病記一斑』桜東園蔵版，1886 年
- ②『日本捕鯨彙考』大日本水産会，1888 年
- ③『小笠原嶋物産略誌』曲直瀬愛閣，有隣堂，1888 年
- ④『田圃害蟲新説』有隣堂，1888 年
- ⑤『日本之南洋』南洋堂，1888 年
- ⑥『農業新論』博文館，1890 年
- ⑦『南洋策：一名南洋貿易及殖民』村岡源馬，1891 年
- ⑧『浦潮之将来』前田菊松，1892 年
- ⑨『小説東学党』林市兵衛，1894 年
- ⑩『南球之新殖民』博聞社，1894 年
- ⑪『日韓交通史 上世史中世史近世史全』博聞社，1894 年
- ⑫『浜寺公園誌』今井文岳堂，1903 年
- ⑬『通俗実験農芸大全』（共著）大日本興農会，1907 年

以上の他に筆者は未見であるが、服部「履歴書」の中には『堺大観』『楠氏遺蹟志』が自著として記されている。従来の研究史の中で服部徹は「南進」との関係で論じられることが多かったが、この著作一覧が示すように彼の関心は「南進」のみならずきわめて多岐にわたっている。その関心の方向を大別するならば、「南進」に関わるもの（③⑤⑦⑩）、「北進」に関わるもの（⑧⑨⑪）、農業・漁業に関わるもの（①②④⑥⑬）、その他（⑫）に分類できる。

こうした服部の多方面にわたる関心は、当時の日本を取り巻く内外の情勢にも大きな影響をうけながら推移していったことはいままでのまではない。その傾向性を書題からうかがうなら、学農社農学校卒業まもない時期は農業や水産業といった第一次産業への関心が顕著にあらわれている。ついで1887年の小笠原諸島方面への巡遊を契機に、「南進」への関心を深めていく。それは明治20年代に隆盛をみる「明治期南進論」の高揚とも軌を一にしている。ついで朝鮮半島をめぐる日清関係、日露関係が重要な外交課題として浮上するにつれ朝鮮半島さらにはシベリア方面への関心を深め、実際にその地を視察したり長期に滞在するようになる。したがって服部徹という特異な人物の全体像をみるには、「南進」論者としてのみではなく、「北進」との関係、さらには彼の調査活動の原点でもあった農業・漁業を軸とする産業立国論との関係も今後解明していくことが必要となろう。

また服部の人物像をみる上で、著作の自序や奥付等に記された筆名、肩書等も参考になりうるので、それを紹介しておこう（反復をさけるため書題は割愛し、前述の番号で表示）。

	「自序」ないし冒頭・最終部分	奥付
①	明治19年仲夏 於江南桜井橋東 編者誌 高知 服部徹編纂	高知県士族、土佐郡中新町60番地
②	南溟漁者徹識	高知県士族、大日本水産会員 東京麹町区有楽町三丁目一番地寄留
③	南溟漁長 徹識 明治21年2月 梅蕾将ニ綻ヒシトスルノ時八重洲橋外ノ寓舎ニ於テ	高知県士族、東京日本橋区上横町19番地寄留
④	桜東園主人徹識	高知県士族 土佐国土佐郡中新町60番地 当時府下麹町区有楽町3丁目1番地寄留
⑤	南溟漁長 徹誌 明治20年12月10日 富嶽雪深ク品海波高キ夕京城寓舎ニ於テ	
⑥	大日本農会員 服部徹著	
⑦	笠島 [小笠原島] 蠻徒凶南居士 明治23年5月10日 夕陽芙蓉峰外ニ没スル時筆ヲ擱ム	東京府下小笠原島父島大村15番地居住 高知県士族、凶南居士
⑧	凶南徹誌 明治25年8月20日 残熱尚ほ洗へず秋風未た到らざるの時浪華小桜橋畔ノ楊柳軒下に於テ	
⑨	日本明治27年3月、朝鮮開国502年春2月、於大日本帝国東京寓舎 雞林逐客 凶南居士識	
⑩	凶南生誌	赤坂区氷川町33番地
⑪	凶南 服部徹著	赤坂区氷川町33番地
⑫	凶南居士編	凶南居士
⑬	明治40年東都 羅府園に於テ 著者識	

この一覧表から判明するように、服部は著作ごとに筆名を使い分けており、一字一句同一のものは③⑤著作の「南溟漁長徹」の2点のみである。（これに②「南溟漁者」を加えると3点）。いずれも最初期のもので、「南洋」に関わる著作である。全体的には服部が号とした「凶南」を用いたものが6点を数えるが、表記は細かくみるといずれも微妙に異なっている。「南溟」にせよ「凶南」にせよ、ともに「南（洋）」に関わる号であり、そこに土佐人服部の色濃い「南」志向を汲みとることができる。

また服部は、幕末・維新时期に幼少年時代を過ごした下級士族（ちなみに①②③④⑦では「高知県士族」と明記）の子弟として漢文の素養を身につけていた。そのことは「梅蕾将ニ綻ヒシトスルノ時……」（③）、「富嶽雪深ク品海波高キ夕……」（⑤）、あるいは「夕陽芙蓉峰外ニ没スル時……」（⑦）「残

熱尚ほ洗へす秋風未だ到らさるの時…」(⑧)等々の雅文調の文言からもうかがえる。

服部徹は晩年に至るまで内外各地を精力的に巡り歩いているが、著作一覧からは朝鮮・京城で脱稿した⑤、小笠原島父島と記した⑦の2点を除き、東京ないし大阪で執筆を終えていることが分かる。ただし⑥は、最終ページに付記の形で「在大阪図南居士」の名で再版時に誤字の訂正をしたいと弁明している。東京では八重洲、有楽町、赤坂という今日の都心部に拠点を置いて執筆活動を行っていたことがうかがえる。

### 1.3 先行研究にみる服部徹

「図南居士」あるいは「南溟」を付した号を服部が多用したこともあって、これまでの彼に関する研究も、広義の「南進」との関連が強調されてきた。ここでは近年の日本における該分野の代表的な著作の中で、服部がどのように論じられているかを概観しておきたい。

1970年代以降、本格化する戦後日本の「南進」研究の中で最初に服部徹を取り上げたのは、矢野暢著『「南進」の系譜』であった<sup>(4)</sup>。矢野は同著の中で、自負をこめてこう指摘する。「『南進論』の系譜の上にこの人物を位置づけるのは、おそらくわたしがはじめての筈である。それほど、この人物は世に知られていない。」「ひとりのかけがえのない『南進論』者として、この服部徹のことはもう少し研究されてしかるべきだと思う。少なくとも『日本之南洋』とか『南洋策』とか、これほどセンセーショナルな題名を自分の作品につけたものは、ほかにはいなかったのだから。」

その上で矢野は、1887(明治20)年の小笠原諸島等への視察後の服部を志賀重昂、田口卯吉、鈴木経勲ら広く知られた明治期南進論の先駆の一人として位置づける。とりわけ『日本之南洋』および『南洋策一名南洋貿易及殖民』を、服部の「勸業主義」に立脚した代表作としてその論点を整理する。矢野は服部の提示する「南洋」とは、列強が虎視眈々と膨張の機会を狙っているフィリピンおよび南洋群島であること、そして宗主国スペインへの抵抗運動が高まっていたフィリピンが他の列強の領有に帰すことになることに服部が強い危機感を抱いていたと指摘する。

服部の議論とくにフィリピンに対する政策論には、「自由民権論者特有のかなり膨張主義的な主張」が認められるとしながらも、矢野は「母を連れ小笠原に住みつ」いた服部の「南進」論を侵略主義的なものではなく、彼自らが用いた「勸業主義」に立つ「貿易及殖民」志向型の南進論として位置づける(187頁)。「母を連れ小笠原[父島]に住みつ」いたとの記述は、服部の『南洋策』に序を寄せた横尾東作の一文に依拠していると思われるが、この「定住」についての確証は筆者は未見である。「住みつ」いたの語が示すほど、服部は長期にわたり父島に居住したわけではないことは後述する。

また矢野は、志賀重昂や横尾東作の強い影響を受けた服部を「南洋群島に日本の権益の焦点をぴしりと決めてみせた」人物と評価するが、服部の著作全体の中で捉えると、それは一時的なものであると言わざるを得ない。

清水元著『アジア海人の思想と行動』は、矢野著作から四半世紀近くを経て刊行された作品である<sup>(5)</sup>。同書において清水は、「平和的海外発展の主張は、服部徹によって最も直截に説かれている」と評価し、彼を恒屋盛眼、横尾東作、依岡省三らと同じ榎本武揚の人脈につながる「膨張主義的植民地主義」とは異質な「南進」論者と位置づける。そして服部の『南洋策』の中で提示された「拓地殖民策」の三パターン、すなわち①「新地発見策」、②「侵食略奪策」③「通商貿易策」を紹介し、服

部を第三の範疇に属する論者だと理解する。経済史家清水は、幕末維新期の日本にアダム・スミスの自由主義経済学はつとに紹介され、しかも南進論者の多くは洋学に親しむ知識人であり、服部徹もその系譜に立つ一人であったと位置づけるのであった。

服部は自らの「通商貿易策」を「一名平和策」と呼び、それは「最モ平和ノ今日ニ適セル良策」だと提示していることに注目し、清水は服部を「いわゆる『アジア主義』的対外思想との対抗関係を強く意識していた」明治中期「南進論」者の一人であったと評する。換言すれば清水は、服部が重視するのは中国、朝鮮に代表される「アジア」ではなく、「日本の南方海洋に広がる地域…今日のいわゆる『環太平洋』地域こそが発展を目指すべき地域であった」と論じ、彼の南進思想においては「より普遍的かつグローバルなつながり」が強調されていることを重視する（170頁）。その意味で自由貿易論に立つアダム・スミスらの「古典派経済学の世界」に属する論者だと服部を定置し、『自由交易日本経済論』（1878年）『南洋経済論』（1889年）の著者田口卯吉との親縁性を強調する。

その田口は自ら士族授産金を得て南洋貿易に着手すべく南島商會を設立するが、服部は前述した履歴が示すように一時期ではあったが、1889年「南島商會支配人」のポストに就いている。このように清水は、服部の南進思想を「平和的・経済的發展」を志向するものと評価し、「アジア主義」的要素あるいは膨張主義との親和関係が稀薄な論者として位置づけている。この点については、次に取り上げる池端雪浦の議論との間に若干の齟齬がみられる。また服部の東アジア、「北進論」との接点については、清水著作では考察の対象とされていない。

明治期日本・フィリピン関係史の観点から服部徹に注目するのが、池端雪浦である<sup>(6)</sup>。池端は『南洋策』にみられる服部のフィリピン関心を、①日本からのまたアジアの中での交通至便性、②スペイン統治下で「敢テ一步ヲ我日本ニ譲ラザル」ほど「国運大ニ開進」していること、そして③近年ドイツが進出拡大をはかっているのでやがては独に商権を握られ、さらにはその領有に帰する危険性があることの3点から議論する。そして服部自らが「拓地殖民」の三類型の内「通商貿易策（一名平和策）」に立つと述べていることについて、池端は彼のフィリピン論の中には「南進防備」保障策の色合い、すなわち軍事的側面が強くみえると指摘する。その上で池端は、服部ら当時の「南進」論者のフィリピン関心は、貿易・殖民・日本の南進防備論の三者が一体化したものであり、さらに機会あらば日本人植民者によるフィリピン占領も視野に入れた野心的なものだとし、それは杉浦重剛、福本日南、菅沼貞風らと同じ「膨張主義的フィリピン関心の流れ」に属するものだと位置づける（9頁）。

服部徹を論じた先行研究の中で、小笠原諸島との関わりについてもっとも具体的に触れたのは石原俊である<sup>(7)</sup>。官船明治丸での巡遊直後に著した服部の『日本之南洋』を検討した石原は、彼が「皇州の南門」小笠原諸島に注目し、そこは「海陸の物産」と「良港湾」（父島二見港を指す）を有し、「物産的ニ軍備的ニ実ニ主要ノ良島」だとし、同諸島こそは日本の「南洋」進出の中心拠点だと位置づけたことを重視する。さらに石原は、『日本之南洋』に続く『小笠原嶋物産略史』においても（前述したようにこの両書のみを服部は「南溟漁長」の筆名で執筆）、服部が「将来ニ望ミアリテ我近南洋ノ経済ニ関係アル」小笠原諸島の水産物と陸産物を詳細に紹介していることも、彼の南洋関心が通一遍のものではなく地についたものだと石原は示唆する。

石原著作も矢野著作と同様、服部徹が母を連れて「父島に移住」したことを重く見、同地で執筆した『南洋策』を小笠原諸島以南との「通商貿易」と「拓地殖民」を軸とする南洋群島経略の「策」を

提示した書であると位置づける。ただし石原は、前述した池端が指摘した服部の「南進」論における「膨張主義的」な側面には直接的には言及していない、すなわち服部にとっては小笠原諸島以南への「領土的拡張」への志向は弱く、「社会的・経済的交通を乗っ取る」方式での進出を意図したものだと言及する（326頁）。その点では服部を自由貿易主義の延長で理解した清水に近いともいえるが、他方では池端論文と同じく新興ドイツの脅威を「小笠原諸島に居を構えた」服部は意識した点についても言及を加えている。

服部徹を論じた以上4点の近年の主要先行研究を通じて得られる特徴について、最後に簡潔にまとめておきたい。

①4著作とも、服部を明治期「南進」論の主要な担い手の一人として位置づける。とりわけ矢野は、代表的な「七人の『南進論』者」の一人として、「意外に思う人が多いだろう」「世に知られていない」（186頁）としつつ、服部を志賀重昂、菅沼貞風、鈴木経勲、田口卯吉、稲垣満次郎、竹越與三郎ら広く知られた論者と共に並記している。

②服部が用いる「南洋」概念の対象として、小笠原諸島以南のポリネシアまで含む南洋群島、そして東南アジア島嶼部であることが論じられる。この地域の中で矢野は、「日本の権益の焦点をぴしりと決め」と形容する南洋群島を重視するのに対し、池端はフィリピンに、石原は小笠原諸島に焦点をあてた服部論を展開している。

③「南進」に関する具体的方策については、服部を自由貿易論の系譜に立つ平和的拡張論者として位置づける清水や石原と対照的に、池端は、「南辺防備」を強調する服部に「膨張主義的」な一面を見出している。

④4著作に共通するのは、服部をたんなる机上の「南進」論者とみるのではなく、今日流にいうならばフィールド調査をふまえた実践的な論者として描いていることである。また「南進」論との関わりでしばしば指摘される「アジア主義」的要因との関わりについては、4著作とも明示的には言及していない。とくに清水は、服部ら明治中期の「南進論」者の多くは、「リージョナリズムを志向するのではなく、自由貿易に立脚した『平和的海外発展』の立場からむしろ『アジア主義』的対外思想との対抗関係を強く意識」していたと強調するのであった。

⑤服部徹の著作一覧からも明らかのように、彼は「南洋」関係の著述のみならず朝鮮半島やシベリア方面までも対象としている。「朝鮮問題」を契機とする対中国・ロシア関係の緊張を背景とするものであったが、この「北進」との関係については矢野が一言触れてはいるが、従来の研究では十分な考察がなされてこなかった点である。だが後述するように、服部は二か年近く釜山に「住みついた」経歴が示すように「北進」とも深い関わりを有する「南進」論者であった。

⑥服部の自筆「履歴書」が示すように、彼は1890（明治23）年以降、六つの新聞社（在朝邦字紙を含む）に関わりをもった。この間数多くの記事を書いたと思われるが、今後はこの点についての検討も服部研究を深める上で不可欠であろう。また履歴書の冒頭に「学農社農学校（津田仙校主）卒業」とあるように、服部は同校創立者・校長の津田仙の薫陶を受け、農業関係の著作も著している。こうした前景も、服部の勸業主義的「南進」経論論に一定の影響を与えていると思われる。その意味でも、次節で一言触れるが津田仙との関係、そして農学校での体験等についても今後さらなる考察が求められる。

## 2. 土佐自由民権運動から学農社農学校へ

### 2.1 共行社社員として

服部徹の出身地高知県においても、前述のように彼に関する一次資料はほとんど残されていない。ただ血気盛んな十代後半の青年時代、自由民権運動の一大拠点土佐において、服部が共行社という政治結社に身を置いていたことは判明している。明治期高知政治史家・島崎猪十馬の著作に依りつつ、当時の状況をみておきたい。旧藩時代から「盛組或は何々組と称して、士格・輕輩各所に割拠分立し、集団を借りて行動」することを好む土佐の政治風土は明治期に入っても変わらず、「市中の士族即ち時の智識階級に属する青年子弟の過半は、かんして各社に加入せり」という状況であった<sup>(8)</sup>。

これらの結社は当初は「青年勉学の指導」が主であったが、明治10年頃から板垣退助主唱の自由民権論に共鳴し、薩長藩閥政治に対抗し国会開設を要求する民権運動の一大拠点に発展する。獄洋社、回天社、有信社等多くの結社が最後まで国会開設要求運動を持続した中で、服部が属した共行社はやがて独自路線をとるに至った。

その共行社は、下級士族出身者が多く住む高知市内北新町に拠点を置いて活動をしていたが、1880(明治13)年10月、社長水野寅次郎が板垣退助と意見を異にし全社員を率いて土佐民権結社をたばねていた立志社(社長片岡健吉)から脱退分裂し、当時の政府与党に与することになった。その際に発出された4000字近い長大の趣意書からは、共行社の基本的な立場をうかがうことができる<sup>(9)</sup>。「今や我党カー邦範圍トスルモノハ何ソヤ、曰ク日本帝国是レナリ。嗚呼我党ハ日本ノ人民ナリ、豈此ノ邦土ヲ愛セサルモノナランヤ」と愛国の念を表明した水野は、その日本は今日「内憂外患」に満ちていると論じる。

「内憂」に関しては、「武門専治の流弊」の結果、「人心怠慢」「民情ノ畏懼」「進取ノ英氣ヲ有セス、自由ノ衰亡ヲ見、自治ノ減失ヲ見ル」状態だと慨嘆する。また「外患」については、「今や外人は虎狼ノ欲ヲ逞シ」くするの状態であり、「是レ何ソ、対等独立ノ帝国ニ於テ、其名アルモ豈ニ真実アリトセンヤ」と悲憤慷慨する。そのような現状分析をふまえ、「趣意書」は共行社が進むべき路線を展望する。「嗚呼急進ノ暴戻ハ…我党ハ之ヲ望マサルナリ…嗚呼漸進ノ改良ハ我党ハ之ヲ好ムモノナリ、我党ハ之ヲ望ムモノナリ」と自らの立場を表明した後、さらにこう続ける。「故ニ我党ハ斯ニ立憲王政ノ制度ヲ設立シ、爰ニ大ニ治國ノ大半ヲ固メ、天皇陛下ノ尊榮ヲ富マシ、着々漸進ノ規準ニ從ハント欲スル者、豈夫レ今日ノ時運ナルニアラスヤ。」

この「趣意書」にみられる「漸進ノ改良」「立憲王政ノ制度ヲ確立」、あるいは「天皇陛下ノ尊榮」等の語が象徴するように、共行社は「一局議院ノ制」を主張する立志社は日本の立憲王政とは相容れない、との立場を鮮明にしたのだった。土佐自由民権運動の研究者外崎光広は、当時の『土陽新聞』(板垣退助創刊)等地元紙を追いつつ民権結社の動向を詳述しているが、1880(明治13)年11月14日付の以下の記事を紹介し、共行社の位置づけを行っている<sup>(10)</sup>。「高知県下共行社長水野寅次郎は先達立志社へ分離状を送りたるを以て同県連合会社より絶交せられたりしに右分離の功及び絶交の勞を録せられにしや此頃内務省準奏任御用掛を拜命せられしと。」当局側による自由民権運動の分断活動の一環を物語る記事といえよう<sup>(11)</sup>。

このように共行社は、民権運動主流の急進派との訣別を表明し、「市の東部新町に籠居し、各社との交際を絶ち全く孤立」の内に活動を続けることになった。そして内部対立をくり返した後「いつし



か壊滅」に至った。土佐民権運動の研究者松岡僖一は、民権家の中で経済的基盤の弱い部分は政府からの援助に期待せざるを得なくなり、その結果自由民権運動から脱落していかざるを得なくなった、共行社の運動からの脱落はその象徴的な事件であった」と総括する<sup>(12)</sup>。

なお島崎著作には、共行社社員として「故人」153名、「生存並生死不明者」121名計274名の氏名が記されている。そして後者の一人として服部徹の名が登場する<sup>(13)</sup>。同書は服部没後四半世紀を経ての刊行であるが、その時点でも「生存並生死不明」とみなされていることから、高知民権運動史（広くは県史）の中で、服部が忘却された人物であることがうかがえる。他方「故人」名簿の中には、1887年服部と同じく小笠原諸島巡遊に加わった依岡省三（1911年没）の名も記されている。同世代の両者が十代後半を同じ土佐政治結社共行社の中で苦楽を共にし、その後は小笠原諸島を起点とする「南進」に深く関わったことは、土佐民権運動史との関係でも興味深いものがある<sup>(14)</sup>。

## 2.2 学農社農学校と校主津田仙

服部徹も少年社員として名を連ねた共行社が立志社と袂を分かったのは、1880（明治13）年秋のことであった。ただし服部が、その時点まで高知において民権運動に積極的に関わっていたかどうかは判然としない。当時の『土陽新聞』『球陽新聞』を検索しても、民権運動との関連では服部の名を見出すことはできない。

おそらくその最大の理由は、服部の上京そして津田仙が創設した学農社農学校への入学であると考えられる。前述した服部の「履歴書」の冒頭に書かれた事項は、「明治16年学農社農学校（津田仙校主）卒業」となっている。同校規約によれば卒業には3年間を要するので、「共行社事件」があった1880（明治13）年には、服部はすでに上京していたことは確実である。この点との関連で『田圃害蟲新説』に序を寄せた同郷の南部義寿は「（服部は）明治13年彼笈を負つて上京…津田氏が開いた学農社に入る」と述べている。

履歴書に校主津田仙の名をわざわざ記したことからも、20歳を前にした地方青年服部が、津田仙の大きな薫陶をうけたであろうことがうかがわれる（ちなみに1枚半ほどの服部の「履歴書」の中で、具体的人名として出てくるのは津田のみである）。事実、その後の服部の著述活動そして小笠原諸島との関わりも、津田仙の存在と学農社農学校との関わりなしには考えられない。

幕末の佐倉藩士の家に生まれた津田仙（1837～1908）は、慶応3（1867）年、30歳の時幕府特使小野友五郎の随員としてアメリカ各地を視察し（後に長女梅を7歳で米国に留学させるのもこの視察が契機、梅は津田英学塾の創立者）、「農は国本」であることを確信する。さらに1873（明治6）年、大蔵省勸農寮勤務を辞し、万国博覧会出席のためウィーンに赴き10カ月近く滞在、高名なオランダ人農学者ホーンブレングから近代農学を学び、洋式農業の重要性、必要性を痛感して帰国する。そして帰国後まもない1875年9月、自宅近くの麻布東町23番地に学農社を設立（翌年1月には機関誌『農業雑誌』を創刊）、あわせて日本で最初の農学校となる学農社農学校を開校した。そこに至る経緯は津田の言によれば、「（オーストリアでは農学を教授する大学もあるのに対し）古来農ヲ以テ立国ノ大本トナセル我日本国ニシテ未ダーノ農学ヲ修ムル学舎ナシトハ実ニ嘆ズベキノ至ニアラズヤト是ニ於テ明治8年一ノ学校ヲ東京麻布ニ設ケ之ヲ学農社農学校ト名〔ズ〕ケ全国ヨリ数多ノ子弟ヲ募集シテ農学ノ教授ヲナシタリ」ということであった<sup>(15)</sup>。

「学農社学校規則」（明治12年8月作成、国立国会図書館所蔵）の序には、「今現ニ入寮セル生徒百余人ニシテ之ガ教員タル者十有余名」であり、創立まもないにもかかわらず「本邦ノ農業ヲ開進シテ富国ノ基本ヲ興起セント欲ス」との抱負が記されている。農学校は予科・本科・外科の三科からなり、予科・外科は年限なく、3年間の「本科ヲ完了セシ者ヲ卒業生ト」みなすことが定められている。服部は履歴書に「明治16年卒業」と明記しているので、逆算すると1880年、まさに土佐共行社が岐路に直面していた年に入学していたことになる。ちなみに正（本）科の授業科目をみると、農業初歩・農業新論、農業化学、農業経済学、牧牛学、家禽学、代数学、幾何学、実験等が生まれ、科学的知識に立脚した近代（歐式）農学を目標としていたことがうかがわれる。

近代日本最初の農学校として服部在学中の1881年には、生徒数175名を数えた農学校も、後発の官立の札幌農学校（現北海道大学農学部）や駒場農学校（現東京大学農学部）が国家助成の下で制度的な充実を遂げる中、服部卒業の翌年1884年12月には財政難のため閉鎖を余儀なくされた。まだ多くの在校生が在学中であったが、勉学継続のため駒場農学校等へ転向するものも少なくなかった<sup>(16)</sup>。

農学校は消滅したものの、学農社の主たる事業であった啓蒙的機関誌『農業雑誌』の刊行は、その後も1920年7月1221号をもって閉刊するまで全国の農村を中心に広く愛読された。服部徹自身も、後述する日本農業に関する二つの短論を同誌に寄稿している。ただ服部との関係でみると、それ以上に注目されるのは、同誌がつとに小笠原諸島に大きな関心を寄せていたことである。その嚆矢が、創刊まもない『農業雑誌』第65号（1878年9月5日）に掲載された論文である。小笠原諸島（硫黄諸島を除く）が日本の版図に組み込まれてから、わずか2年後のことであった。ほぼ時を同じく、その年10月には、父島・北袋沢に内務省勸農局出張所が開設されることになっていた。その初代所長に嘱任されていた武田昌次は、着任に先立ち蘭領東インドを視察し、コーヒー・ココア・ゴム樹などの苗木を父島で試作すべく持ち帰った。

この論文の筆者名は記されていないが<sup>(17)</sup>、「小笠原嶋開拓の説」は、「我内地に在ツて得可からざるの大利益を生ずる者は我日本所領中の唯特の小笠原嶋のみ乎」と力説する（325頁）。そして「大利益」をもたらすであろう農産物として甘蔗、ゴム、キナ、龍眼、檀香木、樟、桂、龍舌蘭、オレンジ、レモン、ヤシ、パイナップル、バナナ等、いまだ日本内地では商品化されていない（亜）熱帯産物産が具体的に紹介された。

農業のみならず漁業においても小笠原諸島には「大利」を期待できるとし、記者はこう述べる。「海産は鯨漁を首とし尚ほ頗る多く捕鯨其他漁業を営むの大利あるハ疑を容れざるなり。」このように海陸ともに新領土小笠原諸島は進出に価すべき地であることを強調し、「境土を広開し特産を増すは邦国共同の福利」だとしつつ、次のように指摘する（332頁）。

「小笠原島の実況ハ概ね右の如くなるを以て有志者奮然として此に渡り或ハ漁等を執り或ハ前に謂ふが如き有益ノ植物を培養するを首とし且我が嚴冬洒沍寒の候に於て茄子なり胡瓜なり西洋野菜なり之を作り之をつみだして東京横浜の間に売出すや… 音に一己の利を得べきのみならず併せて国家に大功あるやを知るべきなり。」

明治10年代に書かれたこの記事でとくに興味を引くのは、温暖な気候を利用して蔬菜を栽培し冬季の京浜市場に移出すべしとの提案である。後年開拓が進んだ小笠原諸島において砂糖ブームが去った後、1930年代に入りこの蔬菜類の京浜市場への冬季移出が島の経済を大きく支えることになったが、その意味で半世紀前の『農業雑誌』に掲載されたこの記事は先見の明があった観がある。

小笠原諸島領有の直後に記者を同地に派遣したことが物語るように、学農社社長津田仙は、この地の産業開発に大きな関心を寄せていた。そして1887(明治20)年初めには、自ら小笠原諸島の視察に赴くことになった。なお先の記事と津田の訪島の間期にあたる1883年には、小笠原諸島をめぐる次のような欧米諸国への対抗感情をむき出しにした記事もあらわれた(『農業雑誌』同年8月11日)。「彼の北海道の臘虎漁と云ひ小笠原島近海の漁利と云ひ我が封境内の海産物にして碧眼児の攫去するに放任し我が邦人の顧みるものなきは何共遺憾の事ならずや。」

津田仙は1887年2月10日、東京府の委嘱を受け横浜出港の帆走船秀郷丸で約1カ月の予定で「物産取調の為」小笠原諸島へ向かう(3月15日帰港)。同船には新任の小笠原島司小野田元熙、父島で「牧畜製塩の業に従事」するアメリカ帰りの製塩家田中鶴吉らも乗船していた。社長津田の出立に先立ち、『農業雑誌』(第254号、1887年1月25日)は、多大な期待感をこめて南島の果樹蔬菜の豊富さをこう紹介している(38頁)。

「同島は気候、地質、物産等の内地と其趣きを異にし冬季と雖ども気候頗る温暖にして諸種の植物盛に繁茂しければ珍味なる果樹の生育するは勿論なる□只今日に於ては之を見る能□ざるは該島の天然□委して更□人勞の及ばざること従て運搬の便未だ開かざるとにより故□是より其方法を需めて該島を打ち開き倍々其物産を盛にして東京へ運ぶに於て□古来より人々の口頭に浮ぶ所の正月二日の初夢に茄子は夢でなく實際に茄子の実物を見るに至るべく其他西洋の「クリスマス」(耶穌の祭日)には蔓々たる葉を持ちたる橙を捧ぐるを得べく又東京紳士の新年宴会にも瓜茄子、唐辛等凡て新鮮の蔬菜を食膳に供□るを得べし。」

帰郷後まもなく津田仙は、「小笠原諸島の説」と題した論考を『農業雑誌』に3号にわたり寄稿している<sup>(18)</sup>。各号とも読者の関心を引く表紙には、海からみた父島の山なみ、奥村地区の欧米系住民の家屋や風景等が描かれている。第270号では小笠原諸島の沿革略史に始まり、位置、地勢、人口、気候、人種等について基本的な情報を提供している。ある程度まとまった小笠原諸島「案内記」としては、最初期のものであった。この内人口については、現在全体で700人(母島200人以上)に達していると報じ、こう所見を述べている(291頁)。「近頃實際農業に従事せんとするものは母島に渡航する人多し是れ地質の豊穰なるの故なるべし母島の人民は殊に農牧を目的とする人々多ければにや人氣も温和にして投機者の如き者少なき様に思はる。」

連載2回目の第271号で興味深いのは、住民についての所見である。まずは「外国人種の歸化」した人たち、即ち1830年に小笠原諸島に最初に定住した欧米系やカナカ系の血を引く人たちを論じる。彼らの風俗は「概ね古陋野卑を脱れ」ないものの、「身体も頗る強健にして其平常の忍耐勉強力」は内地からの移住者と比べその3倍もあると敬意を表する。また「甚だ温和質朴」で「他人と争うことを為さ」ない彼らの暮し向きに触れ、「外国鯨船等の至るとなれば之また牛豚其他野菜菓物等を売

込みて利益を得而して自分の土地財算を愛するの念深き…」と観察する。

他方「内地より移住」した住民は、その温暖な気候や生活に追われることもないため、安易に墮す傾向が強いとして、津田はこう描写する。「奮発して故郷を出で遥かに海に航じて此島に到る者も数年を経れば自から気力緩みて懶惰其性となり遂に火酒の為に生命を犠にする者多きは慨嘆に堪えざる所なり」(306頁)。

小笠原諸島の開拓初期に内地から来島した識者の観察は津田と大同小異であり、いずれも欧米系「帰化人」と比べ内地移住者が劣位にあると論じている。

ついで第272号では、小笠原諸島の鳥類、野豚、漁類、海亀等の生態やその経済的価値に関し、津田は農学者らしい観察を行っている。たとえば山中に棲む野豚については「猪の如く双牙」をもつが獐猛ではなく「肉味家豚に似て脂肪少な」く、飼育して数代にわたれば経済的にも有用であると説く。魚類については、「鯛」「鯉」「鱒」等は内地と大同小異だとし、小笠原諸島近海に多い「鱻」については、漁人は尾鰭は乾物にし、肉は大体投棄し「油をとって樽詰とし鰭と共に輸出」していると観察している。母島近海に多い鯨については「従来外国捕鯨船来りて之を猟し唯油のみを取」り肉は投棄するのが実情であること、そして「本邦人未だ之を猟する者なし」と嘆息する(332-333頁)。

津田仙は上記3回にわたる「小笠原島の説」に続き、『農業雑誌』第273号(同年8月5日)において、「小笠原島民並びに同島に移住せんと欲する諸君に告ぐ」とややふりかぶった題名の一論を寄せている。この号も表紙には、二見港から見た父島の山々が描かれている。4号にわたり父島の自然や家屋が同誌の表紙を飾ったのも、当時の雑誌としてはきわめて稀なことであり、それだけ津田の小笠原諸島にはせた“夢”が大きかったことを物語っている。

この第273号は3回にわたり連載した視察所見をふまえ、今後の小笠原諸島への積極的な進出を提言したものである。まず冒頭で津田は、他日「某貴頭」と面談した折、小笠原諸島に政府は毎年2万円の補助金を支出しているのに対し、同諸島の産出額はわずか5千円にすぎず、これでは「日本の巨介島たるを免れず」なんとか改善する手立てはないか、と問われたことを話題にする。

この苦言をふまえ津田は、ここでも「四時氣候の温暖」な同諸島の特質を生かし「野菜類を作りて内地の季節に先立ち汽船にて〔京浜市場に〕送ること、とくに「野菜類ほど需要の広くして且つ利益あるものは無し」と強調してやまない。しかも東京を中心に鉄道網も各地方に延長され、今後より一層の販路拡張が見込まれる、と付言する。ただ津田は、小笠原諸島との間の輸送に大きなネックがあるとし、従来年4回帆船が往復するだけであることを、「何時にても往復」可能な汽船による定期航海の整備拡充が急務だと説く。

蔬菜類の移出に加え、もう一つ大きな期待が寄せられるのは漁業であるとし、津田は「同島近海の漁業に着目して鯨、鱻等の巨利を収むべし」と説き、魚類豊富で広大な太平洋は「殆んど無尽の府」だと断言する。

また日本領有後まもない小笠原諸島では、住民はまだ納税の義務も免れ「国民たるの権利」をもたない状態におかれているが、諸地方から移住した人々はこの地でひともうけしたら故郷に戻るのではなく、「同島に物産の繁殖を努め各自家に蓄財を積み」「其地を以て墳墓の地と頼み将来此地の繁栄を求めて子孫の為に遠大な謀を為」してほしい、そしてそれが将来的に「人民自治の権利を完うし国家の為に尽するなるなり」と期待するのであった。その一方、当時急進的な禁酒運動の先導役としても

知られた篤信のキリスト教徒津田は、ここでも「同島人民に向けて告ぐべき」は耽酒の弊を一掃することだと訴えてやまない。彼には「風俗の廃退其他百害の源は全て耽酒」にあり、との強い信念があった。

1か月にわたり「父島母島を跋涉」した津田仙は、その所説を次のような一文で結んだ(340頁)。

「思ふに小笠原島の開拓せられて殖産の盛んならんとするは今將に其時運に趣けり本島に在るの諸君及び同島に志あるの諸君は今日に於て速に其望みある地所を得て之に着手せらるべし本島の面積には限りあり今日を猶予し他人に先んぜられ一度人の占むる所となれば他日に至り臍を噛むも其甲斐なかるべきなり。」

この提言から約20年を経た1906(明治9)年、津田は父島の中心地大村・字東町98番地に、一反の土地を購入したのであった。逝去2年前のことであった<sup>(19)</sup>。

### 2.3 学農社農学校卒業後の服部徹

1883(明治16)年に農学校を卒業した20歳の服部は、土佐に帰郷し翌年「高知県判任御用掛」を拝命している。ついで1886年には「大日本農会録事」に任じられ、服部編で『田圃植物病記一斑』という書を著している。翌1887年秋には南洋巡視団に加わるので、帰郷後3年強ほどの高知在住であった。当時の彼の活動に一端については、断片的ではあるが地元紙の記事からうかがうことができる。

高知市立自由民権記念館が編纂した県内紙記事目録を検索すると、服部関連の記事は『土陽新聞』に3点、『彌生新聞』に2点の計5点であり、それもすべて1884年4月に集中している。時系列的にその要点をみておきたい。

「勸業同志大懇談会」と記された見出しの記事(『彌生新聞』1884年4月7日)は、来る13日に高知市内の料亭得月楼(現存)で上記の会合を開くので「同志諸君は来会あれ」との案内で、参加者は発起人ないし得月楼まで連絡ありたしと記されている。服部は、その発起人38人の一人として名を連ねている。帰郷翌年とはいえ、若くして自由民権運動の末端に名を連ねた経歴をもつ服部は、そうした能動的な性格の持ち主であったかにみえる。

ついで4月15日の同紙は、予定通りに13日に玉水新地得月楼で上記大懇談会が開かれたことを詳しく報じている。当日は午後3時ころから「会員続々来聚し夫れより互に勸業上の談話に移す中、ようやく定刻6時を回ってから開宴となる。集まる者30余名、発起人代表として服部が開会の趣旨を述べる。その辞に先立ち中澤村作が発言を求められたが、同紙はその主旨をこう報じた。「我県下に商工会議所を起さん事を望むとの意を演説せられ且之を起さんには先づ苦〔俱〕楽部と云ふを置き夫より漸次之が組織に着手せん…。」

服部の開会挨拶が終わるや否や、一同は「会員互いに杯酒の間に十分に飲を尽し且酌み且談じて全く解散せられしは午後9時過にて…」という盛会ぶりが報じられた。ただ、記事は「但し此日雨天にして遠方よりの来賓無かりしは甚遺憾の事にてありし」と結んでいる。

他方、『土陽新聞』(同年4月15日)も、13日に「勸業同志懇談会」が開かれた(「大」は付されず)

ことを報じるが、細部に関してはより詳しい『彌生新聞』と比べ、若干異なった報道となっている。即ち会場は「玉水新地の得月楼」ではなく、「上の新地陽暉楼」となっており、また服部の開会の辞の後に（前ではなく）中澤耕作が「高知苦楽部」の設立を提案したとなっている。その差異はさておき、地元紙からみれば「土佐発の殖産工業」を内側から促すこうした動きを注目すべきことと映じたことはたしかであろう。

こうした勸業熱の高まりと関連し、『土陽新聞』は、時を同じく持ち上がった「高知水産会」発足の動きを報じている（1884年4月15日、4月17日）。これは県下にすでに勸農会設立の気運が盛り上がり賛同者も少なからずいるのは喜ばしいが、本県物産としては水産物も重要であるとの観点から「水産会発足の主意」が発起人の名で出されたことを報じたものである。この趣意書は同年4月10日付で13名の発起人名で出されており、その中の一人が服部徹である。

そこにはかつての藩政時代にあった水産資源の「保護法」も近年廃絶され、魚床も絶滅しようとしているとの危機感が表明されている。そのため「水産懇話会」を設立し、「魚苗の保育蠣田及珠母場（シンジュバ）ノ築設珊瑚蟲ノ播種等都テ水産ニ係ル事業ヲ奨励」すべく研究を深め、「本県奨来ノ富澤を聞」くことが趣旨であると謳われている。服部に即していえば、2年後の大日本農会への関与とともに県内の勸業に意欲を燃やしていたことがうかがわれる。

高知時代の服部の農学専門家としての著作活動の一成果が、前述した処女作『田圃植物病記一斑』（桜東園蔵版）ならびに『田圃害虫新説』（有隣堂）の編纂である。ここでは「虫害ト病害ノ植物ニ於ケル其関係スル所原同一ニシテ」と指摘され、虫害80余項について説明がなされている。その序には前述したように、「明治19年仲夏 於江南桜井橋東 編著誌 高知 服部徹編纂」と記され、また奥付には「高知県士族 服部徹 土佐郡中新町60番地」と印されている。

20年代初めの血気盛んな青年服部は、故郷土佐の勸業分野に積極的に関わり多忙な時期を送っていた。その服部がいかなる契機、目的をもってふたたび帝都東京に向かったかについては確かな情報はない。ただ恩師津田仙をはじめ農学校時代に築いた人間関係、あるいは修得した学術知識を活用し、より大きな舞台で羽ばたいてみたいと思うのは、彼のような活動的な知識青年にとっては自然の成り行きであったともいえよう。

服部は、1887年はじめに学農社機関誌の『農業雑誌』に短論を発表している。「明治20年以後の農況果して如何」と題して2回にわたり執筆したものである（第252号、第253号）。この論考を服部が高知で書いたのか上京後に書いたのかは定かでないが、その論題からは彼の視線が、土佐を越えて日本全体に向けられていたことが分かる。なによりも重要なのは、この学農社機関誌への執筆を通じ、彼が津田仙との師弟関係を物理的にも復活させたことである。この論文が掲載された『農業雑誌』の刊行と相前後して、津田は東京府の委嘱で小笠原諸島に視察に赴くが、その出張と服部の爾後の小笠原諸島への関与は密接につながっていることはいうまでもない。

それでは日本農業を展望したこの論文で、服部はどのような所見を述べたのかを手短かに整理しておきたい。ここには服部の当時の考え方を知る上でも、興味深い論点が散見される。前篇においては、①日本の地主・小作関係の現状とイギリスとの比較、②国会開設が日本農業に及ぼす影響、③内地雑居・条約改正と農業との関係が主として論じられる。

①に関し服部は、日本の農村社会の封建的体質にきわめて批判的である。この点は欧米的農業を導

入し、それを通じて日本社会そのものの近代化を期待した恩師津田仙の影響が強く感じられる。服部は「地主は貪欲最も飽くことを知らず音に小作人の利便を図らざるは勿論如何なる不虞の天災ありて為に損害の小作人の頭上に墜落するとなるも地主は頑として顧るの状に薄」のが、伝統的な日本農村の現状だときびしく非難する。一方、地主がそうであるが故に「小作人も亦往々狡猾私を営み唯だ己を利するの一方を知りて地主の損失迷惑を顧みざるもの多し」だと指摘する。こうした現実を前に服部は、その具体的解決策を提示することはしないが、次のような憂慮の念を表明する。

「是を以て地主と小作人の間に生ずる紛議の如きは常に珍しからざることにして苟も日本農業の改良と進歩を企望するものは誰が観て以て此状況を憂ざるものならんや…」

そうした日本の実情と対比しつつ服部は、イギリスの大地主とりわけ「有為なる貴族の地主」は、一時的に自分たちに不利益をもたらすことがあっても「小作人の利益となり便宜」をはかり、その対応の仕方は「恰も家人の如く愛児の如く」であると賛辞する。そしてそうした社会的背景があるからこそ、イギリスは「農具及び肥料を始め耕耘の法に至るまで」急速に進歩し、「大英国富強の基」を築いたのだ、と服部は論じる。その指摘が事実であるか否かは別にして、こうした見方は津田仙をはじめ学農社の運営に関わった知識人の間に共通してみられたものであった。その点との関連で、先行研究にみられる津田仙についての次のような評価も一つの参考となろう<sup>(20)</sup>。

「津田仙は単なる農業技術の改良を意図していたのではなく、国の産業の根幹であり、国民の大多数がそれに従事している農業を根本的に近代化し、それによって農民社会の封建性を一掃し、ひいては日本の社会構造の近代化をめざしていたのである。」

②に関し、学農社農学校に入学する以前、土佐民権運動に関わった服部にとって、数年後に実現するであろう「国会開設」という「日本未曾有の挙」はきわめて重要事であると受け止められた。それにより「政治、文物を始め事々物々之が為め大に我国の面目を改むるもの」と大きな期待を寄せた。服部は、国会開設という重要な出来事が「我農業上に於ては如何なる影響を被るべき乎」につき予告することは出来ないと留保しつつも、「必らずや又其影響を受くるの尠少ならざるやを知るべき」だとひそやかな期待を寄せるのであった。

③は、当時の日本で大きな政治的社会的争点となっていた「内地雑居」問題に関連する。服部は近き将来内地雑居が「決行」されるであろうと仮定しても、「直接我農業上に於て其影響を及ぼす程のことはあらざるかと想像せり」と述べる。それは何よりも、日本農業が「小耕作にして耕耘糞培の方法たる如何にも簡なる」特徴をもつので「他の工業或いは商業」分野では「いざ知らず」、農業においては外国人の関心をひくことはないであろう、との見立てである。

以上のような議論を受けての後篇での服部の所見を考察する。ここでは前篇の内地雑居との関連で、外国人（主として欧米人を念頭）の日本農業への参入が主題とされている。日本の農家が習熟する水田耕作への進出は外国人が関心を寄せるものではないが、彼らが「其志を充すに足るべき一地方」があり、それは「東奥北海の地」だと服部は指摘する。明治に入りすでに「耕鋤に着きたる」地は少

なくないものの、関西地方と比べれば、「東奥北海の地」はまだまだ開拓の可能性が大きく、また「地質最も肥沃」な地だと指摘する服部は、外国人の「活潑なる此英敏なる勇氣と志操を以て」するならば、「豈何ぞ我東奥の寒北海の雪を見て其志を挫くが如きことあらん」と展望する。そして彼らが着目するのは水田耕作ではなく、「牧畜の事業是なり」だとし、これこそが彼らをもっとも習熟している分野であると強調する。

他方、日本農業においては牧畜の事業はないも同然で、農家はせいぜい1~3頭の牛馬を「農用又は運搬の用」として使役するだけであった、と服部は述べる。維新以降日本ではようやく肉食の習慣が始まり「人々昔日の迷夢を破り牛馬又は羊豚の牧すべきを知る」に至ったが、まだまだ「此等の大業に向て其志を還ふ」する段階には至っていない、そしてそのことが外国人企業家が、今後の需要増を見込んでこの分野に大きな関心を寄せる要因となっている。そのような現状分析を行った上で、服部は次のような提言をするのだった（36頁）。

「…本邦人の為め計るには須らく速に彼の地方〔東北・北海道〕に決行し勇意此事業を起し以て外人に先ずるを利なりとするなり然るべきは縦令外人が己に内地に雑居するの日に於て志を此に遅くせんと欲するも所謂先ずれば人を制するとの諺に違わず必ずや独り外人をして其利を私する能はざらむべし故に苟も志あるものは予じめ今日に於て茲に着目して以て厥然奮起すべきの秋と云ふべきなり。」

服部はこのように志ある日本人に農業近代化の一環として、はたまた新分野開拓の一法として新たなフロンティア拡大を国内の「北進」によって推進しようとしたのだった。こうした議論も、牧畜をカリキュラムの中で重視した学農社農学校の影響を受けてのものであり、かつ欧米式農業の導入を重視した校主津田仙の教えをふまえたものであった。

ただし、ここでの議論からも明らかのように、服部はこの時点では北方日本へのフロンティアには関心を示したが「南洋」についての関心は示していない。彼が小笠原諸島以南の地域に関心を向けるのは、この論文発表とほぼ同時期になされた津田仙の小笠原諸島視察が重要な意味をもつのであった。

### 3. 「南進」論者服部徹の誕生

#### 3.1 『日本之南洋』と金玉均との「邂逅」

1887（明治20）年11月、服部徹は「南洋火山列島〔硫黄諸島〕探検ノ為メ渡航ス」（「履歴書」）ることになった。東京府当局の委嘱を受けた津田仙が小笠原諸島巡察から戻ってから、わずか8カ月後のことであった。無名の青年服部が高崎五六東京府知事に率いられたこの視察団に参加したのは、東京府上層部とも緊密な関係にあった津田仙の推挙によるものであったと思われる。同時にこの視察の実質的な主唱者であり、当時服部が影響を受けていた仙台出身の「南進」論者横尾東作の「ひき」もあった。横尾は通信相榎本武揚の知遇を得ていたが、一行が乗船した明治丸も通信省灯台局所属船であった。この官船明治丸による視察団は、1887年11月1日に横浜港を出発、同月17日に横浜に帰港する。訪問地は、「三宅島、八丈島、鳥島及小笠原島ヲ経火山群島」までであった<sup>(21)</sup>。



父島・母島を先に視察した津田は、前述したように『農業雑誌』第273号の論文の中で「小笠原島の開拓せられて殖産の盛んならんとするは今將に其時運に趣けり」と宣し、同島への進出を促したが、服部も師のその一文に触発された形での初渡航であった。ただ父島・母島のさらに南に位置する硫黄諸島については、高崎視察団の知事周辺では「殖産の目的なき無用の島地と断定せざるを得ず」との感触を得たのだった<sup>(22)</sup>。

しかしながら25歳の青年服部にとって、この巡遊は彼の南洋関心に一挙に火をつけたようで、帰国直後に視察体験をふまえて『日本之南洋』を刊行する。1888年早々に出版された同書に続き、服部は同年3月には編著『小笠原嶋物産略誌』、4月には前編後編からなる『日本捕鯨彙考』と題した大著を矢継ぎ早に世に出している。いわば小笠原諸島巡遊を契機とするこの1888(明治21)年は、「南進」論者服部図南の誕生した年となった。ちなみにこの3点中最初の2点は「南溟漁長」の号で、もう1点は「南溟漁者」の号で執筆されている。より明確に南洋関心を表した号「図南」が登場するのは、1891年刊『南洋策』以降のことである。

2週間余の訪島視察の報告をかねた『日本之南洋』の自序において、服部はこう強調する(句読点、引用者)。

「伊豆諸島及小笠原島ハ我皇州ノ南門ニシテ殊ニ小笠原島〔父島・母島を指す〕ハ地熱帯ニ近ク地形風物自ラ内地ト異ニシテ別乾坤〔天地〕タリ、草木稠茂鱗介群棲シテ海陸ノ物産乏シカラス殊ニ良港ノアルアリ物産的ニ軍事的ニ実ニ主要ノ良港ト称スヘシ。」

小笠原諸島の中心父島は二見港という天然の良港に恵まれ、経済的にも軍事的にも「皇州ノ南門」であると確信した服部は、同時に欧米列強もこの海域への勢力拡大を虎視眈々と狙っていると理解する。同書に序を寄せた志賀重昂が、その著『南洋時事』において列強の南洋への野心に警告を發したごとく、服部も「我近南洋」=小笠原諸島も同じ状況下であり、ここを「一孤島ヲ以テ目シ觀取テ本土ノ安危ニ感セサルカ如キ妄想」をいだくならば、将来に大きな禍根を残すことになる、と自序を結ぶのであった。

日本領土に編入されてからまだ10年余の小笠原諸島において服部が大きな関心を寄せたのが、初期社会を構成していた「移住人と帰化人」の違い、今日風にいえばエスニシティをめぐる問題であった。1882(明治15)年までに望むと否とにかかわらず日本国籍に編入させられた先住の欧米系やカナカ系住民(「帰化人」と総称)は、服部らの訪島時父島には76人、母島には9人、合計85人と決して多くはなかったが、彼らの存在は初めて内地の外に出た服部には強い印象を与えたのであった。彼らの暮し向きを観察した服部は、その家屋については「数尺ヲ堀り柱を建テ棟桁等ヲ組ミ屋上ヲ葺クニ総テ蒲葵葉ヲ」もってする簡素なものであり、また「家屋ヲ住室寢室ノ二区トシ厨庫皆屋ヲ別ニス什器ハ略欧州風」にしつらえてあると描写する(80頁)。

彼ら「帰化人」の生計の糧については、定職といったものはなく「穀菜ヲ作り牛豚山羊家禽ヲ蓄ヒ蠋龜ヲ捕ヘテ塩蔵シ或ハ池中ニ蓄フト終歳自家ノ食トナスノミ」と自給自足的な色合いが濃いものの、中にはラッコ船や捕鯨船に雇われ賃金を稼ぐ者もいると述べる。また二見港に薪水補給のため寄港する欧米の捕鯨船も数多くあり、「之ニ就キ野菜雞豚蠋龜ノ甲等ヲ以テ衣服器什等必用ノ物ト交易

ス」と観察し、初原的な交易経済が生計の特徴となっていることを指摘する。

他方、同年 1037 人（父島 747 人、母島 290 人）と千名を越えた国内各地からの移住者については、「此等ノ移住人ハ率テ八丈島、伊豆諸島辺ノモノ多ク」と述べた後、その他各地からの移住者には、内地で食いつめたものが多いことをこう記す。「内地ニテ破産失敗ノ徒ニシテ永久不拔ノ卓見ヲ以テ此島開拓ノ基業ヲ謀ルモノハ甚タ少ナク嘗々トシテ目前ノ浮利ヲ謀ルモノ多シ故ニ目今移民中真ニ開拓殖民ノ道ヲ嘗ミ永遠ノ希望アルモノト眼前ノ浮利ヲ謀ルモノニ派ニ分レリ。」

このようにいささかきびしい視線を内地出身の島民に向けつつ、さらに服部は「(彼らの) 人気ハ頗ル軽薄ニシテ懶惰ナリ氣候温暖ニシテ衣服多キヲ要セス食物ハ米穀ノミ充足セハ其他ノ魚類蔬品ノ如キ些少ノ労力ヲ以テ自ラ漁シ自ラ耕シテ自家ノ需要ニ供スルニ足ルヘキヲ以テ其他ヲ謀ラス…、斯ル無頼ノ徒ナルヲ以テ単ニ今日ヲ計テ又明日ヲ知ラス所謂遊々閑々日ヲ消スルモノナレバ移住人カ産ヲ積ミ資ヲ嵩ムルモノアルヲ聞カス」と開拓初期の内地人社会を突き放すのであった。

服部は、このように小笠原社会の「帰化人」と内地「移住者」のそれぞれの特性を観察した後、両者を比較し「帰化人ノ処世移住人ニ勝ル數等ナルヲ知ラス元來此移住人中大數ヲ占ムル所ノ八丈島人ノ如キハ我国人中最も文化ニ感化セサル所謂蒙昧ノ種族ニシテ…」と酷評する。その上で今後の展望として服部は、こう述べるのだった。「嗚呼此島ノ前途恐ルヘキハ此帰化人ニアルナリ移住人ニシテ今ヨリ之ヲ戒メ而シテ勉メスンハ終ニ彼カ奴僕タルヲ免レサルヘシ…。」

いささか極論するならば、服部は主に欧米にルーツをもつ「帰化人」のライフスタイルの奥底に欧米的（「近代的」）な文明の根痕を認め、自らもその側に立って内地移住者の後進性を見出すという「脱亜」論的立場を無意識にうちに露呈させるのであった。

「日本之南洋モ多事ナリ」と力説するように服部は、小笠原諸島のもつ地政学的な地位にも関心を向ける。ただし服部は日本領の小笠原諸島は「野蛮蒙昧ナル土蕃カ棲居スル南洋群島ト」異なり「一島ノ施政確然トシテ整ヒ其ノ人民モ亦幾分カ教化ニ服浴」しているのだから、あえて列強に抗すべく「殊更之レニ備フル」必要はないと論じる。そう述べる一方服部は、列強による「拓地殖民政略ノ盛ナル今日ハ」些細なことをきっかけに「妖雲慘怛 殺氣天ヲ蔽フ日」がくる可能性も否定できないので、「海防ノ事ハ実ニコレ治ニ居テ乱ヲ忘レサル」ことが肝要であると説き、「当路者以テ如何トナスヤ嗚呼当路者以テ如何トナスヤ」と声高に訴えるのであった。

小笠原諸島を「我カ皇州ノ南門」と捉えた服部であったが、先の議論からも明らかなように、彼はこの「南門」からの軍事的な「南進」を提唱するのではなく、「皇州」を外敵から守るべき門だと理解したのであった。約言すれば専守防衛の要衝と位置づけたのであった。また興味深いことに服部は、幕末近く未だ帰属国が定まっていなかった小笠原諸島の海防を説き、その対外関心故に幕府の禁忌にふれた仙台藩士林子平を国際的な視野をもった先覚者の一人として評価している。

服部の「南進」思想における「アジア主義」性との関連で、彼の父島訪島当時その地に配流の身であった朝鮮民族主義者金玉均について一言触れておきたい。金玉均、林永孝ら独立党による甲申政変に失敗後、1884 年暮れ日本に亡命した「親日派」指導者金玉均であったが、対清関係悪化を憂慮する日本政府の手で、1886 年 8 月 9 日父島に移送され幽閉の身となっていた（1888 年 1 月母島へ、同年 8 月札幌移送、94 年 3 月上海で暗殺）。

金玉均追放に至る政府当局の判断は、同年 8 月 2 日付の井上外相から山県内相への次のような照会

から汲みとれる<sup>(23)</sup>。「内地より隔絶せる小笠原島に送致し、夫々取締致置候へば…内国之治安を妨害し、外交を障碍する之憂も有之間敷と存候…(従者4人同行)同島在島中は難民救済規則に依り取扱候外致方無之と存候…。」

このように官憲監視下におかれていたものの、離島ということもあり金玉均は、「難民救済規則」の範囲内である程度の行動の自由は許されていた。日本国内でも甲申事変以降の名士金玉均の動静は同情の念をもって大きく報じられており、服部もその名は熟知するところであった。

そのこともあって短い訪島期間中のある一日、服部は「寂莫タル風光地…前ニ野羊山ヲ望ミ港内ノ眺望極メテ佳絶」の地扇浦に閑居中の金玉均と面談の機を得たいと、その居宅を訪れる。しかし不在のため面会がかなわず、大村の寓居に戻ると外出中に金玉均その人が訪ねてきたことを知らされる。服部は応対に出た者に金玉均の様子をきき、こう書き留めた(49頁)。「同氏ノ容貌ハ全く日本人ノ如ク言語モ亦ヨク通シ一言一語ノ間威風凛々トシテ当ルヘカラス慷慨ノ気自ラ顕ハレ其人ニ接シテ益々欽慕ノ情ヲ厚カラシム…。」

この賞賛の言葉を首肯しつつ聞いた服部は、放逐中の朝鮮人志士への親近の情を隠そうとせず、次のように述べるのだった。「金氏カ此孤島ヲ出テ朝肆廟堂ニ入ルノ日モ亦ナシト云フヘカラス憐ムヘキヤ英雄ノ不遇ニアリ金氏請フ自愛時機ノ至ルヲ待テ。」その「時機、至ル」ことは無論なかったものの、指摘しておきたい点は、服部は決して「アジア主義」的な政治的連帯から彼に接近したのではなかったということである。

この点は、大井憲太郎ら自由党系壮士の「朝鮮改革運動」にも関わった玄洋社員の「アジア主義者」来島恒喜らの金玉均との接触とは決定的に異なっていた。頭山満にもつながる大井らの動きに対し「政府の警戒甚だ巖に、密偵飛ぶが如し」の状況下、来島は「的野[半介]、竹下[篤次郎]と共に小笠原島に航し、其厄難を免れるに至」った<sup>(24)</sup>。それは金玉均配流の4カ月前、1886年4月中旬のことであった。

彼らは「小笠原亡命」に先立ち協議を重ねたが、来島は「苟も我國民にして東邦經營の任務を全うせんと欲せば亦併せて南洋經營の設備を懈る可からず」との立場から、こう論じていた(註24著作、68頁)。「われわれの東方問題に対する「政府の圧迫日に甚し」い中吾人は、世上の閑却する南洋方面に於て探検の実を挙げ宝庫を発見し利源を開発し由て以て徐ろに東邦問題に対する準備の策を講ぜんには。而して其第一着として小笠原島に航し其方針を定むべし。」

すなわち国内で頓挫した金玉均、朴永孝らと提携しての「東方問題」解決を小笠原諸島を拠点に実現しようとの趣意であった。いわば彼らが政府に対する抵抗の拠点をみなした小笠原諸島に、その政府の手で「危険人物」金玉均が追放されてきたのだった。彼らは奇遇を喜ぶと共に「日夕相往來して前途の運命を策」するも、来島らの父島滞在は長く続くことはなく、この企図は頓挫した。実務的「南進」論者服部徹が小笠原諸島に着島するのは同年11月のことであり、彼と「アジア主義的南進」を夢想した来島恒喜らとの接点はなかった。

### 3.2 服部徹のその後の「南洋」関連著作

#### (1) 『小笠原嶋物産略誌』編纂

小笠原諸島巡遊の副産物である本書の序において、服部は『日本之南洋』と並行しながら本書出版

のつもりであったが、事情があって遅れたことを釈明する。表裏一体の関係にあるこの二著作の内、前著はその書題が物語るように政論的なおもむきが強いのに対し、本書は小笠原諸島の陸海物産を網羅的に紹介した百科全書的な実用書となっている。

きわめて短期間の訪島であったが、「平生農桑物産ノ事ニ志」を有してきたと自負する服部は、「着島ノ後ハ日夜東西ノ山海ヲ跋涉」し、これまで書物を通じて知るのみであった各種物産を自分の眼で観察できたことはきわめて有益であり、近年同諸島の物産に関心を寄せ渡島を考える人々の参考に供することを願う旨を記すのであった。

物産紹介に先立ち服部は、緒言において父島・母島の地理、略史、社会等を概説する。父島については「全島山谷深岨ニシテ平曠ニ乏シト雖モ地味肥沃加ルニ氣候恒ニ暖□ナルヲ以テ奇木異草島中ニ茂生」しかつ植物の成長の早いことに驚嘆する。母島も「地味父島ヨリモ肥ヘ岩石モ亦少ナク樹木更ラニ高大ニシテヨク繁茂セリ」と観察する。

陸産のみならず海産についても、父島は良港二見港に恵まれ「全島沿海魚□ノ利甚タ多シ」、したがって「人或ハ本島ヲ称シテ我邦ノ楽土仙境トナス」といっても過言ではないかもしれないと述べる。だが、それにクギをさすかのように服部は、「然レドモ畜ニ楽土ニアラス畜ニ仙境ニアラサルナリ」と述べつつ、大いに努力することによって「我皇州南洋ノ金庫タルヲ失ハサルヘシ勉ヘキハ…唯是レ陸海物産ノ事業ニアルノミ」と強調する。

そうした前口上をふまえ服部は、小笠原諸島の物産を陸産物と海産物に大別し、さらに前者後者とも、植物門、動物門、鉱物門に三分する。その上で各門ごとに類に分けて具体的に紹介する手法をとっている。以下では、陸産物の中の植物門穀菜類を事例にして紹介しておこう。

「穀菜類 稲は北袋沢時雨山下の旧勸農局試験地に試作したることあれども結果よろしからず  
○麦は近年試験せしも意外な豊作を得たり尤も収穫は5月中旬なりといふ、○玉蜀黍は外国より  
伝はりしものにて父母両島の土人多く之を栽培す」

といった簡潔な説明を付した後各物産の特質を紹介する。

また水産部・動物門・海獣類についての冒頭部分をみておこう。「鯨は此近海最も多く殊に母島沖村の洋中及び向島、平島の間等に多し…古来海外の鯨猟船時々此に到りて漁獲せしこと多し」等、クジラについての詳細な説明がなされる。その中で幕末文久3（1863）年、小笠原近海で洋式捕鯨を試みた土佐人中浜万次郎（ジョン万次郎）と北越の富豪平野廉蔵の二人を日本の捕鯨界の先駆的存在として紹介している。

また信天翁（バカドリ）＝アホドリについても、くわしく紹介される。小笠原諸島や鳥島における開発とアホドリの関係については、その「先駆的存在」として知られる玉置半右衛門の事業を中心に近年貴重な研究成果が上梓されているが<sup>(25)</sup>、服部自身も本書以外にアホドリについて「鳥嶋信天翁の話」と題した専論を発表している。この論文は服部が明治21（1888）年4月から7月まで八丈島南方の鳥島での玉置半右衛門らの「アホドリ撲殺事業」の視察結果を「多少動物学上に裨益あらん」ことを意図して執筆したものである。

服部はこの貴重な記録の中で、玉置の名に直接は言及しないものの、「棍棒を携へ」た移住者たち

は「一人一日百羽二百羽を殺すことは至難にあらず」と形容し、「撲殺」のすさまじさを記している。そして「遠く望めば白雪を堆積するが如く」信天翁が棲息する鳥島での大量「撲殺」を暗に難じつつ、こう述べるのであった<sup>(26)</sup>。

「実に此島の如きは我南洋中稀有なる一孤島といふべし。余輩信天翁を友とすること久し其友誼に感じてその事〔撲殺状況〕を世に公にすると…。」

アホドリ捕獲との関係で、ここで服部徹と玉置半右衛門との関係についてもう少し触れておきたい。両者は、1887年秋の高崎東京府知事率いる視察団に同乗、その途次玉置はかねてから着眼していたアホドリ羽毛採取事業を実行に移すため鳥島で一行と別れた。郷里八丈島から労働者を移住させての玉置の本格的なアホドリ撲殺・羽毛採取事業で玉置は巨利を得、明治富豪の一人に数えられたことは周知のとおりである。

服部は翌1888年、さらにマリアナ諸島、カロリン諸島等南洋群島巡遊に赴くが、その途次上述したように鳥島に立ち寄り玉置の事業をつぶさに観察した。玉置は鳥島進出にあたり東京府から明治21(1888)年3月から同30(1897)年12月までの10年間の同島借用を許可されていた。ただしその目的としては、「鳥島開拓牧畜並びニ漁業之事」との申請書が出され、それが受理された。そのことを把握していた服部は、玉置が「開拓」を放置し、ひたすら羽毛採取に専念していたことをかねがね批判的にみていたのであった。

こうした伏線があったことにも起因し、1894(明治27)年になり服部(当時赤坂区氷川町33番に居住)は、蘆田親寿(高知県人、麴町区有楽町居住)、山崎悦治(大分県人、京橋区采女町居住)と連名で、2月15日付で東京府に対し「東京府管下鳥島沿海漁業之儀ニ付御願」と題した書類を提出した<sup>(27)</sup>。この「御願」書の中で服部らは、鳥島の玉置が申請に反し「事業上開拓ハ勿論漁業等ニ着取致候事毫頭無」く、同島はまったく未開拓のまま放置されていると告発する。彼らは「全人〔玉置〕ト何等之恩怨モ無之」ことを強調しつつ、日本の水産業進展の見地から「一意専心沿海之漁利ヲ探り国家萬一ノ裨益ヲ期ス決心」で本要望を提出するに到ったと訴えた。彼らの主張は、鳥島の海岸地に「家屋建築」をなしそこを漁業活動の基地として利用したいということであった。

その「願」を閉じるに際し、服部らは自分たちは事業をめぐる玉置と袂を別つたものの、「事業上玉置ト相確執シテ該島之安寧ヲ害スル様ノ事ハ決シテ仕間敷候」こと、そして鳥島近海での漁業は「私共續年之宿志」であることを説くのであった。

しかしながら同年3月17日付の府知事三浦安からの回答は、服部徹らの期待にそぐわぬものであった。その理由は、同島は「明治30年12月まで〔玉置半右衛門に〕無地料ニテ貸渡」中であるが「但沿岸及公衆ノ通行スヘキ」土地には「家屋建設ヲ許可スルハ□当ナラサルノミナラス紛議ヲ惹起スル」可能性があるとして、「本願ハ許可セサルモノトス」ということであった。爾後、服部と鳥島の接点はないまま、1902年8月鳥島大爆発の悲劇の日を迎えることになる。

## (2) 『日本捕鯨彙考』

水産王国土佐に生まれ高知水産会の設立発起人にも名を連ねた服部徹は、前述の『小笠原嶋物産略誌』においてもクジラについて多くの紙幅を費やした。本書は、そうした「服部鯨学」を集大成したものである。ただこの学術的価値も高い本書は、服部一人で著したのではなく、「自序」で述べているように大日本水産会名誉会員田中芳男(元老院審議官)の長年の仕事を引き継いだ形で公刊され

たものである。

服部自身は「捕鯨ノ事タル平生聊カ期スル所アリテ其調査ヲ望ムヤ久シ」と自負しているが、そうした折、斯界の権威である田中芳男が「百方苦心の余遂ニ東西散逸ノ諸書ヲ蒐集シ將ニ之レカ編纂ニ着手」するところであった。しかしながら「公私繁務」のためそれがかなわぬ状況にあった田中は、「之カ編纂ノ事ヲ〔服部に〕嘱セラル」ことになった、と服部は出版の経緯を叙している。その意味では本書は服部徹名で公刊されているが、彼が率直に述べているように田中芳男との共同作業の成果であるといえる。

本書は、日本で最初の本格的な捕鯨あるいは「鯨学」に関する百科全書ともいべき性格を有するが、大日本水産会が緒言を述べ、また農商務省が出版助成を行っていることからうかがえるように、政府・業界が明治日本の殖産興業の一環として捕鯨を発展させたいとの政策的な意図のもとに編纂されたものである。大日本水産会による「緒言」は、「鯨利ノ洪大ナル」点について、こう述べる。「鯨ヤ其皮肉ハ以テ食スヘク又油、蠟ヲ製スヘシ齒骨ハ以テ器ト作スヘク臟腑モ亦以テ食フニ足ルヘシ其他有名ナル鯨腦、龍涎ノ効用アリ其一頭ヲ獲スモノ必ス千金ヲ収ムヘシ…。」

前篇後篇からなる浩瀚な本書は、前篇では「本邦沿海ニ来遊スル鯨ノ諸説」を論じ、後篇では「之ヲ捕獲スル方法順序」が詳述される。この内容から分かるように、本書はとくに小笠原諸島に焦点を置いて執筆されたものではない。ただしその「附録」の部分で服部は、自らの捕鯨論を展開しており、その中で日本の洋式捕鯨の先鞭をつけたものとして前述の『小笠原島物産略誌』でも言及した中浜（ジョン）万次郎と平野廉蔵の両者の名を特記している。また興味深いのは、「捕鯨と海軍の関係」につき欧米強大国の諸例をひきつつ、その密接な補完性を指摘していることである。

一例として服部は、捕鯨船の水手は海の水路を熟知しており「戦艦の進退を誤つか如きことあるなし彼の英船の豪州を発見し米船の我小笠原に繫留し或は布哇に通ずる等は皆其捕鯨船の自在に遠洋之航海するより得たる所」だと述べ、捕鯨が国家の進運にも不可欠な手段であると強調する。また日本の鯨史稿にみられる「鯨部寓兵」の説をこう引用する。「海防の備には鯨組を設くるに如はなし無事の時は鯨を漁し万一事の出来らん時は水戦の用に備へなは海防究竟の武備と云ふへし」（189頁）。

これまでその概要を紹介した『日本之南洋』『小笠原嶋物産略誌』、そして『日本捕鯨彙考』という1888（明治21）年前半に相次いで公刊された三著作は、勸業主義に立脚した実務的「南進」論者服部徹の存在を、強く世に印象づけることになった。三著作は対象とする主題こそ異なるものの、そこに通底するのは日本の「近南洋」と呼称した小笠原諸島への経済・産業的な関心の大きさである。「皇州ノ南門」あるいは捕鯨と海軍の不可分性の指摘等海防的関心も表明されているが、それは小笠原諸島を起点とした膨張主義的な「南進」論、あるいは「アジア主義」的対外進出論とはいいがたい。あくまでも服部の真骨頂は、殖産興業の理念に立った実務主義的・勸業主義論的「南進」論であった。

小笠原諸島との関連における服部の当時の動静をみる上で、以下の「小笠原島人懇談会」と題した新聞記事も興味深いものがある<sup>(28)</sup>。

「小池又兵衛、服部徹両氏の発起にて一昨15日午後4時より大橋際万千楼に於て小笠原島人懇親会を開会せしが、来会者は目下上京中の同島人及び同島物産販売店、同島に縁故ある人々等50余名なりし由、因に記す同島目下の状況は近来内地より良民の同島へ移住する者も増加し明治廿

年以後は開墾製造等の業も漸次盛大に赴き随つて物産も次第に増加するの模様なれば此儘にて進歩を過つことなければ遠からずして充分の繁昌を見るに至るべしといふ。」

### (3) 『南洋策一名南洋貿易及殖民』

服部徹が1888(明治21)年、上述の三連作を公刊後、次に「南進」に関わる著作を世に問うのは3年半後の1891年秋のことであった。この『南洋策』には、かつて共に小笠原諸島、火山(硫黄)諸島を巡遊した先輩格の横尾東作、そして「南進」論の重鎮志賀重昂らが序を寄せている。精力的に著作を出版する服部の存在が、この分野において大きな注目を集めていた証であった。

軍艦「比叡」に乗船し「南洋ニ航スル」前日の同年9月19日付で序をしたためた横尾は、これまで多くの著述家から「序」を求められたが、それらを「一切拒絶致候」だったが、服部の『南洋策』だけは例外中の例外であると述べ、「図南ノ名已ニ海内ニ轟ク、其書ヲ閲シテ其实識ルヘシ、夫レ奇書ハ奇士ヲ待テ出ツ、図南ハ奇士也、南洋策ノ奇書タル予ハ之ヲ疑ハス」と絶讃してやまない。

『日本之南洋』に続き本書にも序を寄せた志賀重昂は、日本が直面する二大課題として第一に「歳々四拾三万人宛増殖」する人口問題、第二に「実力増殖の結果」として生じる物産の輸出市場をいかに解決するかをあげ、その観点からも服部の今著作は「比律賓群島及び微小洲群島[ミクロネシア]の貿易並ニ殖民ヲ論」ずるもので、まさに「日本国の運命を断定すべき諸問題」を把握する上できわめて有益であると評価し、一文をこう閉じる。「嗚呼此学の日本帝国に利益する蓋し挙げて数うべからず、『南洋策』の我同胞四千万人を警戒する夫れ果して幾何ぞや」

なお本書には、横尾東作、志賀重昂の他に梅崖山本憲による漢文の序、ならびに徳富蘇峰の服部宛書信も付されている。山本の「序」のむすびは「図南姓服部。名徹土佐人、今置籍於小笠原」と記されており、この時点で服部は一時的ではあったが父島に在島中であつたことがうかがわれる。

蘇峰の書簡は読後感を伝える簡潔な内容(1891年9月29日付)で「尊著南洋策一読再読頗る快活を感じ候」で始まり、「願くは他日拝顔の上細論するを得ん、先は右迄匆々不一」と結んでいる。

『南洋策』において服部は、近世日本人が進取の気性に富みつとに南方に新天地を求めてきた歴史を振り返り、それに比べると現今の日本人ははなはだ後塵を拝していることをまず強調してやまない。すなわち服部は、16世紀末から17世紀初め多くの日本人が「貿易ニ植民ニ、其他拓地侵略ニ従事シ…其勇壯ナル志気、其豪宕ナル精神」を持ち合わせていたと賞讃し、「其気風ノ活発ナル冒険起業ニ熱心ナル」点は、今日と雲泥の差があると嘆息するのだった。

「鎖国ノ迷夢」から醒め20余年が経ち、ようやく海外に航するものもあるとしながらも、服部は「桑港[サンフランシスコ]ノ不浪人、香港新嘉坡[シンガポール]ノ醜業者流[「からゆきさん」]ヲ増加」させている現実に不快の念を表す(136頁)。そしてこうした現状に対し、「我先人カ懐抱セシカ如キ、至大ノ目的ヲ有スルモノ太タ稀ナリ、故ニ近キニ就テ遠キヲ去リ、其易キヲ取テ難キヲ捨テ、其楽ニ遊ンテ苦ヲ避クルカ如キヲ常トス」と悲憤慷慨の言葉を連ねるのであった。

本書において、服部が現今日本人が目に向け進出すべき「南洋」とは、現在の国際情勢を視界に入れるならば「今ヤ事ニ当タリ機ニ臨ミテ最モ急ナルモノアリ乃チ我日本帝国ノ近邇シテ、親密ナル関係ヲ有スル群島」であるとす。その「群島」とは具体的には、フィリピン群島、ミクロネシアのマリアナ、カロリン、マーシャル、ギルバート群島を対象とし、「以上ノ群島ハ目今我邦人カ鵬翼ヲ伸

ブベキノ地」であると説くのであった。事実服部は前述したように、1888年マリアナ、カロリン両群島を視察し、翌89年には田口卯吉を中心とする南島商会の経営にも深く関わった<sup>(29)</sup>。

服部が切迫した筆致でこれら群島に対する進出をうながす大きな背景には、当時の西太平洋をめぐる列強の本格化する勢力拡張があった。彼は日本を取り巻く厳しい情勢を等閑視するならば、必ずや後悔することになるだろうとの観点から、こう論じる(140頁)。「北露ノ強勇ナル西清ノ狡猾ナル、固ヨリ戒ムヘシト雖モ寧口南独ノ惶ルヘキニ如カス、我南門タル琉球小笠原ノ如キ世人其枢要ノ地タルヲ知ラス」。

このように服部は、南洋に対するドイツの野心に強い警戒を示すと同時に、近時日本の新領土となりかつ「皇州ノ南門」でもある琉球列島と小笠原諸島(ここはまた大洋州の北端と認識されている)の重要性を強調してやまない。ここで服部は、ペリー提督来航時もし幕府が開国を拒絶していれば、米国は「琉球及ヒ小笠原島ニ抛リ、以テ我沿海ニ突進セシヤ疑ヒナシ」と述べ、両地域が米占領下におかれたならば「我日本ノ安危果シテ如何ナルヘキヤ」は明白であると指摘する。「慈善ノ国」である米国でさえそうであるので、小笠原諸島が「若シ之レニ代ルニ強悍ナル独逸」の手中に帰したら一体どうなるであろうかと提起する。服部は、すでにそのドイツはフィリピン、マーシャル、カロリン諸島を脅かす存在になっているとして、こう警鐘を発する(144頁)。

「世ノ志士タルモノ、斯ノ南洋多事ノ秋ニ際シ徒ラニ空々タル妄想ニ奔馳シ、漫リニ空中城楼ヲ築クコトヲ休メヨ、宜シク勇往邁進以テ速ニ凶ル処アル可ク、正ニ是レ斯ノ如クニシテ可ナリ。」

#### (4) 『南球之新殖民』

日清戦争勃発の直前1894(明治27)年6月に刊行されたこの書は、服部が信州出身の松岡天南という彼と同世代の青年の冒険譚を「天南生実検談」としてまとめたものである。天南は、若くして小笠原諸島以南の南洋一帯を放浪し、その後豪州サースデイ島(木曜島)への日本人移民の先駆けとなった人物である<sup>(30)</sup>。

服部は「余輩同志南洋の拓殖を説き、身自ら此煙波間に投し、幾多の辛酸を嘗め労苦を積」んできたが、その同志の一人が「硬骨の最も稜々たる快男児」天南である、とその破天荒な半生を激賞する。そして天南の「献身的快絶」の事跡を明らかにすることは、「世の営利的若くは名誉崇拜的新冒険者流の肝臓を寒からし」めるものとなる、と断言する。こう述べる服部は、彼が南洋の一部とみるオーストラリア方面への進出の先駆＝「南球新殖民の代表者」としての天南の歩みを、血湧き肉躍るといった感の筆致で描くのであった。

一方、その天南は同書に寄せた関係者への謝辞の中で自らの半生をこう回顧している。「天南生豪洲に流浪し、自ら過って劣等労働者の群に入り蛮烟瘴霧ニ星霜、昨は幸にして木曜日島の義使なる同胞に救はれ、今は凶らずも其同胞諸氏の代表者として、初めて郷国に帰ることを得たり、何の歓か之に加へん<sup>(31)</sup>。」

こう自らを語った天南は、自分の航跡を実録としてまとめてくれた服部徹を、逆にこう紹介する。当時の服部の状況をみる上で興味深いものがある。



「天南生に一知友あり、図南と称す、夙に南洋遠征を説き、身早く近南洋に投じて苦楚を嘗む、屢々貿易を企て遠航を計りて成らざる再三、『日本之南洋』及『南洋策』を著して後不遇を操觚[新聞界]の間に訴へ、転じて浦潮斯徳及び朝鮮に航し、昨居留民の爲めに法弊を難じ、不幸にして逐客の身となる、生偶ま京に相逢ふ、互に相欣ふこと極りなし…。」

この後半部分で紹介された服部の動きについては次章で述べるが、意気投合した同世代の天南・図南の両者は相陽大磯の松林館に投じ、天南は「流浪の事及び新殖民の景況」をつぶさに語った。その数日後、服部は天南の語りをもとに「一篇の新著」を持参し公にすべしと説く。天南は「再三固辞」するも服部の熱意と情宜に屈し、出版を諒としたのだった。こうした経緯もあって天南は、その謝辞をこう結ぶのだった。「翻つて図南兄執筆の勞を思へば、縦令其手腕の平生敏且健なるにもせよ、其勞大なりと謂はざる可からず深く感謝する所以なり。」

志賀重昂は、服部の著作に対する三度目となる序を本書に寄せているが、このことも当時の「南進」論議の中で天南の大洋州進出が注目を集めていたことの証であった。志賀の「序」は、15歳で上京、八丈島、鳥島、小笠原諸島さらにはグアム、ニューブリテン諸島、オーストラリア等を探検した天南の「前半生の行奇」を紹介し、これからの後半生が「其の事業を大成するの秋」だと激励し、こう送辞した。「何ぞ、君歳未だ三十[1865年生]に満たず、前途尚ほ春秋に富む、君豈に空しく老ひんや。」

#### 4. 服部徹と「東アジア」問題への関心

##### 4.1 「東雲新聞」に入社

同志松岡天南の直話に基づく冒険譚を文字化した『南洋之新殖民』は、数年来「南進」に深く関わってきた服部にとって、この分野での事実上最後の著作となった。折しも日本は、「朝鮮問題」をめぐる清国との関係が一段と緊張の度を増していた。

こうした日本を取り巻く東アジアの国際環境の中で、30代に入っていた服部は、これまで看過してきた東北アジアへの関心を急速に深めていった。著作でみるならば、『南球之新殖民』刊行の3カ月前、1カ月後にそれぞれ『小説東学党』『日韓交通史』と題した著作を公刊している。もちろんこれによって服部は、「南洋」への関心を放棄したわけではなく(後述)、むしろ「通商産業国家」日本を実現する上で、「南進」と「北進」は唇齒輔車の関係にあるとの認識に至ったためだと考えられる。

この両著作を検討するに先立ち、前述した服部を評した松岡天南の一文にみられる服部の新聞界との関わり、そして朝鮮からの「逐客」事件について触れておきたい。服部の新聞社との関わりを、あらためて時系列的に追っておく。1890年「大阪東雲新聞」記者、1892年朝鮮・釜山で「東亜貿易新聞」を創刊し主筆に<sup>(32)</sup>、1896年帰朝し「やまと新聞」主筆、1898年「毎日新聞」政治部編纂長、1906年日本通信社入社、1907年「大阪日報」記者(服部徹「履歴書」)、すなわち彼の後半生16年間に6新聞と関わりをもったことになる。元來文筆の士であった服部は、自らの考えを広く社会に訴えるには新聞という媒体が望ましいと判断したのか、その動機や目的についてはさだかではない。

一方興隆期にあった新聞界も、名文家で精力的に著作を上梓してきた服部のような存在を求めているという事情もあったかと思われる。従来新聞は、日本最初の日刊紙「横浜毎日新聞」(1870年創刊)

が神奈川県当局の保護下にあったことが示すように、「上意下達」の手段として誕生した。しかしながら明治10年代に入り、自由民権運動の高揚と同時に新聞は「政論のメディア」としての性格を強めるようになった。土佐民権運動から出発した服部が最初に関わった「東雲新聞」は、まさにその典型であった。

『東雲新聞』は服部入社2年前1888（明治21）年1月初、大阪で自由党系人士と板垣退助周辺の民権論者の手で創刊された自由民権派の政論紙として知られる。その主筆には、前年「保安条例」で東京から2年間の退去命令を受けた中江兆民が迎えられた<sup>(33)</sup>。兆民の名声もあり、同紙は国会開設を前に全国的に盛り上がりを見せていた自由民権運動の一大結節点として関西地方を中心に多くの読者を得、藩閥政府批判の論陣をはった。ただ同紙は1891年10月には休刊に追い込まれているので、服部が同紙記者として活動しえたのは一年強の短期間であった。

当時父島を離れ東京と高知を往来していた服部が、どのような経緯で同紙記者となったかは資料的に裏付けられないものの、板垣退助、中江兆民ら土佐出身の民権派最高指導者の影響下にあった同紙の関係者から、何らかの働きかけがあって入社した可能性は十分考えられる。ちなみに「保安条例」で東京から退去を命じられたのは約570人であったが、その内兆民や片岡健吉を含め土佐出身者は234名にも達し<sup>(34)</sup>、その中には服部旧知の運動家も少なからずいたものと思われる。以降服部は生活の拠点を大阪に移し、記者生活と共に前述のように大阪商工会議所や堺市等との関わりをもつことになるのであった。

#### 4.2 ウラジオストック訪問、釜山からの追放事件

服部徹が故意か否かは定かではないが、自筆履歴書に記入していない重要な事実がある。それは、在釜山日本総領事によって同市から退去命令を受けたという事件である。先に松岡天南が「逐客」と記したその追放は、1893年7月、服部が「東亜貿易新聞」の主筆として健筆をふるっていた時のことであった。この経緯を、当時の国内の新聞報道からみておこう。

『読売新聞』、『朝日新聞』両紙とも同年7月23日付の記事の中で、釜山の邦字紙「東亜貿易新聞」主筆服部徹が、室田義文総領事により同月12日（実際は16日）に次のような厳命を受けたことを報じた。

「其方義予て本港〔釜山〕に在留する処平素の行為上に就当地方の安寧を妨害せんとするに付明治十六年第九号布告清国及朝鮮国在留日本人取締規則第一条に依り満二ヶ年間朝鮮国に在留することを禁止す依て同規則第二条に従ひ十五日以内に退去すへし但し此処分に対しては同規則第五条に依り上訴することを許さず。」

邦字紙の創刊者兼主筆として、急速な形成途上にあった在釜山日本人社会では名士の一人に数えられた服部への退去令は、少なからぬ波紋を投じ、さまざまな憶測をよんだ。「読売新聞」（7月25日）は、服部が「東亜貿易新聞」紙上で総領事への個人攻撃をしたり「社会党様のもの」を組織し、「強迫的取材の挙動ありたること」等により「下等社会の人心を取攬することに務め」たこと等がその理由ではなかろうかと報じた。

他方「朝日新聞」は、7月23日付で報じた総領事による「言渡書」の冒頭に記された服部の現況をこう紹介する。「大阪府西成郡曾根崎村二千六百六十七番地 士族当港弁天町三丁目十九番寄留無職業 服部徹廿九年十月月〔本論での服部の年齢については、これを根拠〕」。さらに同紙は、いかなる理由で服部が「在留禁止」となったかは「未だ判明せざれども」と留保しつつも、「東亜貿易新聞」の記事を追いつつ次のような背景考証を試みている。

7月上旬一暗夜に乗り服部を狙撃殴打し、また12日に宿所に投石、危害を加えようとしたものあり。これは在留邦人谷垣嘉市という人物の所為と判明、谷垣は同地警察署に拘引、領事裁判所で予審終了。

16日一谷垣嘉市公判、谷垣はその陳述の中で、服部は室田総領事を烈しく誹謗中傷したり転任運動をなすなど「日本帝国に將た朝鮮国及び居留地の為めに害毒」となるので「殴打狙撃せり云々」と発言。これらの陳述内容が服部徹の在留禁止の原因になったものではないかと論じつつ、「朝日新聞」記事はこう結ぶ。「従来在留禁止せられたる者多くは風俗壊乱の虞あるもののみ其国事を談論し国家の安寧を害するものとして在留を禁止せられしは此服部氏を以て嚆矢とす。」

1893年7月16日付の室田総領事の「言渡書」によれば、服部は「15日以内に退去」「満2年間の朝鮮在留禁止」となるはずであった。すなわち1895年7月末では、訪朝の機会は許されないことになる。この決定が実行に移されたか否かは判然としない。というのも服部「履歴書」によれば、1894年「帰朝」、95年「再ヒ朝鮮ニ渡航ス」。96年「帰朝」となっているからである。月名が書かれていないため、朝鮮再渡航が禁止解除によるものなのか定かではなく、また「帰朝」が1894年となっているのは、出国が遅延されたものなのか否かも明確ではない。

服部の朝鮮出国が退去令によるものなのか自発的帰国なのかはともかく、1894（明治27）年に服部は、朝鮮に関する上述の二著『小説東学党』『日韓交通史』を上梓している。前者には「朝鮮開国五百二年春二月 於大日本帝国東京寓舎 鷄林逐客図南居士」、後者には「図南、赤坂区氷川町三十三番地」と記されている。「鷄林」は朝鮮の別称であり、「逐客」の語と合わせ、朝鮮から追放されたことを逆手にとった呼称を用いたのであろう<sup>(35)</sup>。

### 4.3 ウラジオストック視察所見

『東亜貿易新聞』の創刊とは別に、服部と朝鮮との関係において特記すべきは、それ以前の1891年にいち早く服部は「朝鮮ヲ經テ東部西比利亞地方ヲ視察シ」、翌92年には『浦潮之将来』と題した一書を上梓していることである。1890年代以降、服部の主たる関心が「南進」とともに、あるいは時代を背景としてそれ以上に「北進」に移行していることがうかがわれる。ただし「北進」においても、経済・通商的な関心が主となっている。『浦潮之将来』の自序の冒頭は、こう始まる。「拾九世紀の末葉に当り。亜細亜の絶東に一大警鐘を鳴らして。吾人が惰眠を醒す者は。実に旧満州の海參威。今の露領西比利亞の東南岸。浦潮斯徳の要港にぞある。」

これだけを読むと服部は、ロシアがウラジオストックを拠点として膨張主義的な南下に乗り出すことを警戒しているかにみえる。しかし服部の真意は、そこにはない。ウラジオストックは、30年前は「清領満州吉林省に隸属」する「窮北不毛の一寒地」にすぎなかったが、1861年に帝政ロシア領に編入以来今日では、「殆んど新欧州の偉觀を亜細亜絶東の地に現出した觀があると、服部は寒冷

地訪問の第一印象を描く。

そのロシアは伝統的に「南出」を悲願とするが最大の目的はコンスタンチノーブル（現イスタンブール）にあり、それを実現するにはイギリスの存在が最大の障壁になっているとし、服部は「露国が絶東に対する政略は、日本にあらず、朝鮮にあらず、唯一の英国にあるのみ」と観察する。したがって日本は、たとえロシアが軍事力を強化しシベリア鉄道を開設したとしても、「敢へて徒らに懼るべきに非らず」とロシア脅威論を一蹴する。

反対に服部は、ウラジオストックを中心に人口90万人を擁する東シベリアこそ「早晚我れの需要者たり。購買者たるは信して疑はざるなり」と断言するのであった。日清戦争後の三国干渉を機に日本の対ロシア感情は急激に悪化するが、当時の服部はむしろロシアに親近感すら抱いていたことが、前述した「徒らに懼るべきに非らず」に続く次の言葉からもうかがえる（4頁）。「況んや我れは露人が将来の地中海と称する日本海の要を扼するに於てをや…我れは其守る所に拠り、彼の露人が豪放愚直にして商事に慣れざるの機に投し、一葦の水路を便し、貿易に、漁業に、速に万金を獲するの策を講ずるに如かざるを知る。」

こう論じた服部は、東シベリアこそ「日本商人の大花主〔顧客〕」であることを力説してやまない。そして「南進」論者服部は、自序において次のように表白するのだった。

「余が眼中従来南洋なる一観念あるのみ。或は痴鹿の笑を免れざらんことを恐る。於是飄然北に航せは思ひ半ばに過ぐるものあり。其所感を録して此書を公にせり。若し南洋策と相對し看ば。恐くは東半球偏東南北の大勢を知るに足らん。」

#### 4.4 服部徹と朝鮮

1887年秋、小笠原諸島を巡遊した服部が父島に幽閉中の金玉均に接触を試みたことは前述した。当時の日本の知識人にとって隣国朝鮮の動静は大きな関心事であり、とりわけ金玉均、朴永孝ら「親日派」の政治指導者の活動は新聞雑誌でもくわしく報じられた。旧土佐藩の下級士族出身で自由民権運動にも関わった服部にとっては、金玉均は畏敬の対象でもあった。服部の恩師津田仙も1883年7月初めて訪朝して以来、朝鮮とは密接な関係を築いており、その影響もあったのかもしれない<sup>(36)</sup>。

服部が初めて朝鮮に渡ったのは1891（明治24）年シベリア訪問の途次であり、それ以来朝鮮とは、とりわけ在朝日本人社会とは「南進」以上に深い関わりを持つようになった。1894年、『小説東学党』『日韓交通史』を著したのもそのあらわれであった。前者は「朝鮮に対する所見」をふまえた「一種の政治小説」だと述べる服部は、自序において「余朝鮮に遊ぶ前後二回駐留□久しからず未だ深く其形勢を知る能はず」状況ではあるが、版元社長から「彼の風俗人情及び当今の形勢を捉へて一篇の政治小説」に仕立ててみたらどうかと打診され、当初は「餅屋に強るに酒を以てする」ものだと断るが、結局は承諾することになったと記している<sup>(37)</sup>。

あくまでも小説の形をとっているが、服部はかつての金玉均らの「乱」（甲申事変）は「時期を早まりたり」とみた上で、「金氏が執りし所の主義目的は、東学党に於て亦幾分か之を執れり」という現状理解に立って執筆している。さらにいえば、金玉均に同情の念を寄せつつ、「今日朝鮮に於て少しく海外の事情を知る者、即ち開化主義者流は、暗に金氏を欽慕し、氏を招ひて廟堂の一改革を行は

しめんと欲する者多し」とまで服部は、金玉均に寄りそった形で発言をしている。しかしながら、服部が囑望したその金玉均は、同書公刊直後の1894年3月28日に、刺客の手で上海で暗殺される。

それから4カ月後に刊行されたのが、『日韓交通史・上世史中世史近世史全』である。書題が示すように、古代から日清戦争勃発前夜「[1884年]6月上旬より大兵陸続日本を発す」るまでの日本・朝鮮史を全15章で祖述したものである。服部は「嗚呼神功の親征豊公征韓の役を除き前後未だ曾て斯の如き大兵を海外に出したる事なし今後風雲の変揺得て予の知るへからず戒心すべきなり」と所感を叙すのだった(173頁)。

また服部にとって、本書執筆中に遭遇した金玉均の死は大きな衝撃であった。結章では、その惨殺を悼みつつこう描写する。「玉均の屍は大逆不道の罪を以て各国公使の忠告ありしに關せず揚花津頭に於て六断の惨刑に処せられ梟示の上首肢は尚ほ八道の要所に曝され幹軀は漢江の淵に投せられたり。」

## おわりに

20代から日本の農業・漁業、南洋問題、そして東アジア問題を柱に多彩かつ精力的な著述活動を続けてきた服部徹であったが、上述の『日韓交通史』が事実上最後の著書となった。それ以降の服部は、大阪や朝鮮・釜山に拠点をおく諸新聞と関わりつつ、日本とやがて日本の植民地となる朝鮮との間を足繁く往来していた。大阪に主たる活動の拠点を置いたのも、朝鮮との交通の至便性からであろう。また堺史編纂主任をつとめたり(1902年刊の『浜寺公園誌』はその一成果)、大阪商工会議所囑託として「保護貿易調査」に従事するなど、文化や産業方面で健筆をふるう日々であった。1907年、最後の職場となったのも大阪日報という新聞社であった。

服部が囑託をつとめた大阪商工会議所は、『貿易通報』という月刊機関誌を刊行しており、そこには商都大阪にふさわしく貿易通商をはじめ内外の産業経済関連の調査報告や統計が満載されている。たとえば明治39(1906)年5月号の調査報告として、「阪神両港に於ける綿織物輸出状況」「英領北ボルネオ及サラワクの概況」「蘭領爪哇島の概況」、そして「スマトラ島の状況」の4本が収められている。筆者名は記されていないものの、4本中3本が東南アジア島嶼部関連のものであり、日露戦争後の関西経済界が該地域に大きな関心を寄せていたことが判明する。これらの調査記事に「南進」論者として知られた囑託服部徹が、何らかの形で関わったことは確実であろう。2年後の外務省委嘱を受けての蘭印視察も、こうした服部のキャリアと関心の延長上にあった。

ちなみに「蘭領爪哇島の概況」は、ジャワは蘭領東インドにおける「政治上並に商業上最も緊要の位置を占め」、とくに首都バタヴィア(現ジャカルタ)が繁栄しているのは、「此地方の生産力の盛んなるを証する」ものだと指摘する。しかも蘭印政府は、貿易政策においてこれまで「一にも専売、二にも専売と云如き有様」であったが、近年はその弊害を認識し「官業を縮少して私人の自由企業に委する方針」をとっていると分析する。関西の貿易業界にとっても大きな「ビジネスチャンス」が開かれている、との論調である<sup>(38)</sup>。

ところで外務省当局が1908年に服部に求めた蘭印での調査課題の一つは、「在留日本人ノ状態」であったが、この点についても『貿易通報』は「爪哇に於ける日本人協会の設立」と題した3頁ほどの記事を掲載している<sup>(39)</sup>。この記事は服部が渡南する4カ月前に出たものであり、現地ジャワの日

本人商工業者の間でも本国との経済関係の強化をはかろうとしていた時期であった。

この記事は、蘭印の大坂ともいべき大商都スラバヤで昨 1907 年に「日本人協会」が設立されたことを報じ、日本の貿易業界にとっても今後の進出を促進する上できわめて時宜を得たものだと強調している。この日本人協会（会長田辺吾一、副会長岡本與之助）の「設立趣意書」も紹介されているが、そこでは「今や吾人は国家の一員として戦後〔日露戦争〕重大なる経済的負担と任務を双肩にして海外万里の市場に在り何ぞ奮起せざるべけんや」と強調され、「外務省及び枢要なる商業会議所並に新嘉坡帝国領事館」等と協力し、「我帝国の光威を発揚し貿易産業其他の事業を奨励」することが謳われている。

さらに前述した服部のウラジオストックを中心とするシベリア東部進出論との関係で注目されるのは、『貿易通報』1906 年 12 月号に「浦鹽自由港問題の成行」と題した記事が掲載されていることである。それはロシア政府の商務大臣が「黒龍沿道総督府管内に輸入する外国貨物」にふたたび関税を賦課するという文書を閣議に提出したとの報道である。

これは川上浦鹽貿易事務官から「其筋へ」送られた情報の紹介であるが、本件はロシア議会内でも簡単に協賛を得ることは困難であり、少なくとも 6 カ月の日時を必要とするであろう、と展望している。いずれにせよ、東シベリア市場が日本とりわけ関西経済界の熱い注目を集めていたことのあらわれであった<sup>(40)</sup>。

以上概観した蘭領東インドを主とする南洋市場の魅力、在ジャワ日本人商工業者への期待、東シベリア方面への商権拡張は、すでにみてきたように 19 世紀末以来の、服部徹のもっとも関心をいだいたテーマであったことを確認しておきたい。

もともと「南進」論者として社会的に認知され豊富な人脈もあつたことと思われるが、服部は翌 1908（明治 41）年 3 月 23 日付で外務省より「蘭領ニューギニア、セレベス、爪哇〔ジャワ〕、波羅〔ボルネオ〕ニ於ケル左記事項調査ヲ囑託ス」と筆書きされた辞令を交付された<sup>(41)</sup>。その左記事項とは、「一、気候、地味、人情、風俗、二、農、商、鉱業ノ状態、三、在留日本邦人ノ状態」の三点である。地域こそ異なるが、いずれも服部がこれまで小笠原諸島、南洋群島、東シベリア等を対象に論じて来た、いわば手慣れたテーマであった。なおその辞令に記された服部の居住地は大阪ではなく、渡航に備え直前に移り住んだ東京市麴町区土手三番町七番地となっている。

外務省囑託としての旅券、査証等取得の渡航手続きの必要上と思われるが、服部は本論でも随時援用した自筆「履歴書」とともに「南洋渡航の目的」と題した一枚の毛筆書き覚書を提出している（外務省外交史料館所蔵）。そこには最後の旅立ちとなるのは露知らぬ服部の、次のような抱負がしたためられている。

「一 南洋ノ事ハ二十年来ノ熱心ニ基キ三年前来蘭科植物採取ノ為メ南洋ニ渡航セント欲シ苦心ノ結果漸ク茲ニ其目的ヲ遂行スルノ時機ニ会セリ。本年二月東上後帝国大学及ヒ大隈伯、岩崎男〔爵〕邸ノ温室ヲ調査シ又田中〔光顕〕宮相ノ厚意ニ依リ新宿御苑並ニ華頂宮家ニ伺候シ温室拝見ヲ得タリ。

一 南洋ニ商品ノ試売ヲ為サンガ為メ東京及大阪商業会議所ノ紹介ヲ以テ各薬舗其他ニ交渉ヲ遂ゲ多数ノ商品ヲ携帯スル事トナレリ。

一 渡航順路ハ左ノ如シ。台湾南清ヲ經香港ヨリ比律賓群島マニラニ至リ、同群島ノ各処ヲ跋涉ス。蘭領新幾尼亜〔ニューギニア〕、セレベス、爪哇、波羅等ヲ視察ス」

この自筆文書が示すように、服部の渡南目的は、かねてから関心のあったラン科植物の採集ならびに薬品を主とする日本商品の市場開拓であった。また「南洋ノ事ハ二十年来ノ熱心」と自負するように、服部は明治 21（1888）年の著作『日本之南洋』以降、南洋方面への日本の商権拡張が日本のとるべき方策であると主張してきたが、それとの延長線上での蘭印行であった。官費出張ということであり、政府当局からある種の政治的軍事的な情報収集を求められた可能性も否定できないが、服部の主たる関心はそこになかったこともこれまでの著作から明らかであろう。

むしろ服部徹がこの時期に蘭印巡遊を具体化し、また外務省が 250 円の調査費を支給した背景には、彼の出立に先立つ同年 4 月、日蘭領事条約が締結され日本とオランダの植民地蘭印との間の「国交」が公式に始まり、日本国内とくに経済界の中に輸出対象国、あるいは移民先としての蘭印への関心が高まりをみせていたという事情もあった。翌 1909 年にはバタヴィアに日本領事館が開設され、また山形県人堤林数衛による南洋商會が開店し以後の商業移民という形での蘭印進出の基礎が築かれたり、三井物産がジャワ支店を開設したのもこの年のことであった。

服部にとってはこの蘭印行は、青年時代からの自身の南洋経綸のいわば総仕上げと位置づけられたものと思われる。そうした高揚感とともにジャワ行の便船を待っていた矢先の、冒頭で触れた不慮の事故死であった。その急逝の五日後 1908 年 5 月 29 日付『朝日新聞』は、服部の死を悼みつつこう報じた。

「氏は壯年より夙に冒險的雄志を抱き明治二四年伊豆七島を探検して植物学の著書数種あり夫より南洋スマトラ島の□□に深く入りて珍奇なる植物を採取して帰り爾後再び渡航を企てつる徐ろに壯志を養ふに努むる傍操觚〔新聞界〕に従事する事多年此の度愈好機に到達したるを以て再び南洋探検の壯途に就きしが不幸奇禍に罷りしは痛惜すべし。」

10 代で土佐の自由民権運動に飛び込み、やがて青雲の志をもって上京した服部徹は、津田仙の率いる学農社農学校で洋式農学を学ぶ。同校卒業以降、経済産業・貿易、拓地植民による小笠原諸島およびそれ以南の南洋群島各地への進出を唱導、さらには朝鮮から東シベリア方面への商権拡張を提唱した服部徹は、自らの平和的・経済的「南進」論の帰結点を見ることなく 45 歳の生涯を異郷で閉じた。服部の生涯に大きな影響を与え、また彼に小笠原諸島との邂逅を準備した恩師津田仙は、服部に先立つちょうど 4 カ月前の 1908 年 4 月 24 日、東京から鎌倉の自宅に帰る列車の中で脳出血のため急逝していた。満 70 歳であった。

## 註

- (1) 『朝日新聞』1908 年 5 月 29 日。
- (2) 『高知県人名事典』（高知新聞社、2000 年）『土佐偉人伝』（歴史図書社、1976 年）にも記載がなく、生年不明の略歴が『太平洋百科事典』（原書房、1989 年）、『日本人名大事典』（講談社、2001 年）にある程度である。こうした中で桜井義之「小説『東学党』とその著者」（1939 年 12 月）『明治と朝鮮』桜井義之先生還暦記念会編、1964 年所収は、朝鮮との関係が主で

- あるが、服部をこう評している（172頁）。「土産の熱血児で、彼もまた明治中期の国土的風格を備へた烈々たる気骨の持ち主であった。」
- (3) この点に関しては、以下を参照。後藤乾一「ジョン万次郎・平野廉蔵と小笠原諸島―幕末維新期の洋式捕鯨をめぐる一考察」『アジア太平洋研究』第29号、2017年。
  - (4) 矢野暢『南進』の系譜 日本の南洋史観 千倉書房、2005年（原本は中公新書、1975年、1979年）、186-188頁。
  - (5) 清水元『アジア海人の思想と行動―松浦莞・からゆきさん・南進論者』NTT出版、1997年、168、171頁。
  - (6) 池端雪浦「明治期日本人のフィリピンへのまなざし」池端、リディア・N・ユール・ホセ編『近現代日本・フィリピン関係史』岩波書店、2004年、5-9頁。
  - (7) 石原俊『近代日本と小笠原諸島―移動民の島々と帝国』平凡社、2007年、314-316頁、329-330頁。
  - (8) 島崎猪十馬「明治時代高知旧各社事跡」『土佐史談』第36号、1931年9月、38-39頁。
  - (9) 同上、53-56頁。
  - (10) 外崎光弘『土佐自由民権運動史』高知市文化振興事業団、1992年、129頁。
  - (11) この時期の高知政治史については豊富な研究蓄積があるが、平尾道雄筆になる高知新聞社編『土佐百年史話―民権運動への道』浪速社、1968年、が基本的な流れを跡付けている。「あとがき」において平尾は、「明治日本のナショナリズムと歩調を同じくするもの」であるが、土佐においても「民権主義」と「国家主義」の抗争があったことを指摘する。
  - (12) 松岡惺一『土佐自由民権を読む』斉木書店、1992年、34頁。共行社の本部が置かれた新町は、藩政時代には徒士、足軽クラスの下級武士の居住する地区であった。そうした経済的背景もあり、明治14年から翌年にかけて共行社員約50名は福島県安積郡対面ヶ原に土族援産金を得て開墾移住を行った。高知新聞社編、前掲書、374-375頁。
  - (13) 島崎猪十馬、前掲論文。
  - (14) 清水元、前掲書、166頁は、「(二人は) 函南の志を同じくする者として一時共同事業をしていたが、性格の違いからのちに袂を分かつことになった」と述べている。
  - (15) 三好信浩『日本農業教育成立史の研究』風間書房、2012年、358頁。また近代農学の先駆としての津田の農法を詳細に論じたものとして、以下を参照。田村栄太郎『日本の技術者』興亜書房、1943年、404-418頁（「津田仙」）。
  - (16) その一人が玉利喜造である。学農社農学校を中退し後年東京帝国大学農学部教授となった玉利については、以下を参照。『玉利喜造先生伝』玉利喜造先生伝記編纂事業会、1974年他。
  - (17) 高崎宗司『津田仙評伝―もう一つの近代化をめざした人』草風館、2008年には無署名なものも含めた「津田仙著作目録」が収められているが、この論文は含まれていない。
  - (18) 津田仙「小笠原諸島の説」『農業雑誌』第270号（1887年7月5日）、第271号（同年7月15日）、第272号（同年7月25日）。
  - (19) 「旧土地台帳 小笠原村父島」法務局閲覧室所蔵。
  - (20) 細谷俊光編『人物を中心とした産業教育史』帝国地方行政学会、1965年、40-41頁。
  - (21) 高崎視察団の概要については、当時の一次史料を集成して整理した東京都編『東京市史稿 市街篇第72』1981年、617-649頁を参照。
  - (22) 明治丸史編集部会編『明治丸史』東京商船大学、1982年、18頁。
  - (23) 鹿島平和研究所編『日本外交史第3巻』1970年、142頁。
  - (24) 的野半介監修『来島恒喜』精美堂、1913年、65-66頁。
  - (25) 平岡昭利『アホウドリと「帝国」日本の拡大―南洋の島々への進出から侵略へ』明石書店、2012年。望月雅彦「玉置半右衛門と島島開拓―明治期邦人の南洋進出の視点から」『南島史学』40号、1992年。本論文も服部を「南洋進出の先駆」の一人としてあげている。
  - (26) 服部徹「鳥嶋信天翁の話」『動物学雑誌』第12号、1889年10月15日、405-411頁。
  - (27) この問題については、東京都公文書館所蔵の「一件書類」（620.B3.01）を参照。
  - (28) 『朝日新聞』1889年9月17日。
  - (29) 「服部履歴書」には「明治22年南島商会支配人トナル」と記されているが、管見の限り南島商会についての先行研究の中で服部の名は見出せない。
  - (30) 天南は本名松岡好一（1865-1921）、長野県安曇郡北長尾村出身、15歳で上京、新門辰五郎のもとに投げさらに劍客榊原健吉に入門、後「東洋自由新聞」記者となる。明治16（1883）年小笠原に渡り小学校教師となるも罪を犯し鍛冶橋監獄に投獄、出獄後九州各地を流浪、「高島炭坑の惨状」を明治31年雑誌『日本人』に発表、大きな社会的反響をよぶ。その後三宅雪嶺の北守南進論に共鳴、明治24年9月、三宅らと軍艦「比叡」に便乗オーストラリアへ、シドニーで艦を離れ単身木曜島に渡り真珠採取や椰子栽培等に着手、日本人進出の先駆となる。松岡については以下を参照。『大人名事典第5・6巻』平凡社、1957年、『ジャーナリスト人名事典・明治～戦前編』日外アソシエーツ、2014年。古くは、田中弥十郎「南進先駆者『松岡好一』」『興亜之工業』1943年2月号、48-51頁。松岡自身の著述として「豪洲ニ於ケル真珠採収業ニ就テ」『大日本水産会報告』第142号、1894年4月、301-319頁。また 岡成志編『依岡省三伝』（株）日沙商会、1936年（非売品）の口絵写真に、「明治24年12月、濠洲シドニー府に於て（南島探険隊一行）」とのキャプションが付いた写真があり、そこには三宅雄二郎



- (雪嶺)、依岡省三らと共に松岡好一も写っている。
- (31) 『南球之新殖民』刊行から10数年後、木曜島を訪れた大島景秋は、同地における人種差別の烈しさに衝撃を受け「有色人種特に日本人を主」に対象とする厳しい点検ぶりを非難すると同時に、「今更ながら我外務省なるもの無能なるに驚く」と当局の不作為を追及している、「木曜島在留邦人の窮境」『外交時報』第131号、1908年10月10日、56-59頁。
- (32) 「東亜貿易新聞」について矢津昌永『朝鮮西伯利紀行』小柳津要人件、1894年に、以下のような一文がある(50頁)。「当地[釜山]発行の『東亜貿易新聞』に…我々一行に関する元事を掲げて曰く『…地理地質研究の爲め来韓中の第五高等学校教官矢津昌永君及兵庫県中学校長小森慶助君と、相伴ひ来る。三日、当港出帆、海路元山へ出発の由なり』」
- (33) 東京追放時、兆民は親友末広重恭(鉄腸、「関西日報」経営)に、皮肉と自虐を込めた次のような書簡を送っている。「末広君、余は実に恥じ入りたり。此度一山四文の連中に入れられたり。満二ヶ年東京に在ることを得ず。因てひとまず浪華に退去す。自由平等の主義、益々尊ぶべきかな、明治政府の仁慈もまた至れるかな」高知新聞社編『土佐百年史話』浪速社、1968年、412頁。
- (34) 高知新聞社編、前掲書、411頁。
- (35) 「雞林」の語に服部が愛着の念を持っていたことが、次の記事からもうかがえる(『朝日新聞』1896年1月24日)。「朝鮮釜山には従来朝鮮時報と称する一新聞あり熊本國権派にて之を支配し大畑秀夫氏其社主たりしか今度服部徹氏の發企に係る雞林社の成立と共に雞林新報の刊行あらんとするに際し釜山或人々の尽力に依り双方合併の約整ひ其規模を拡張し服部氏主筆となり来2月早々改題初号を發刊する由にて服部氏は既に渡韓の途に上りたりと。」
- (36) 高崎宗司、前掲書、第6章「朝鮮人との交わり」参照。
- (37) 『小説東学党』については、註2で紹介した桜井義之論文を参照。
- (38) 『貿易通報』1906年5月号、29-30頁。
- (39) 『貿易通報』1908年1月号、35-37頁。
- (40) ウラジオストックを中心とする東シベリアと日本との関係は、服部が同地を訪問した1890年代初め頃から観光を通じて始まっていた。1890年に上海の最有力英字紙「ノースチャイナデイリーニュース」が雲仙紹介の記事を掲載し、それを機に上海、香港、ウラジオストック、ハルビン等から多くの観光客が長崎雲仙に来遊した。また1872年にはウラジオストック・長崎間、長崎・上海間が海底ケーブルでつながり、前年開通の上海・香港間海底ケーブルにつながった。山崎功(助言)東加代子、Ta Thi Huyen、清川千穂、田中佑実「雲仙・島原史の多文化研究—交易と信仰から地域振興の時代へ」『佐賀大学芸術地域デザイン学部論文集』第1号、2008年、78頁。
- (41) 「服部徹蘭領ニューギニア、セレベス、爪哇、波羅地方状況調査之件」1908年3月23日(外務省外交史料館所蔵資料)。服部はその15年前、前述のように駐釜山総領事室田義文により朝鮮からの退去を命じられた。今回はその外務省からの委託というもの皮肉な巡り合わせであった。なお室田はその後メキシコ駐在弁理公使等を歴任後、1901年に退官し、貴族院勅選議員となった。1909年10月にはハルビン駅頭で暗殺された伊藤博文に随行し同地を訪問している。外務省外交史料館日本外交史辞典編纂委員会編『日本外交史辞典』山川出版社、1992年、994頁。